
封印の住処

汐井サラサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

封印の住処

【Nコード】

N9608N

【作者名】

汐井サラサ

【あらすじ】

代々、鬼退治を生業としてきた旧家雪杜に生まれた何の力も持たない夕鈴が、入ってはいけない蔵に入り、開けてはいけない壺を開け、封印の鬼を目覚めさせてしまったことから始まった鬼と夕鈴の主従関係を描いた物語、のはず……。

月夜の晩

絶対に触れてはいけないもの。

絶対に開けてはいけないもの。

そんなものももし近くにあつたら、そのままにしておくなんてとても無理。

だから、ちょっとだけ、ほんの少しだけ自分の好奇心が満たせばそれで良い。

伸ばした指先が捉えたものに……実は囚われていたなんて、思いもしなかった。

「埃っぽすぎる」

夕鈴^{ゆうすず}は、傾いた陽が差し込んでくるだけの蔵の中へ忍び込んでおきながらばやいた。

彼女の生家は代々、荒らぶるものを鎮めることを生業としてきた家柄だ。

今では拝み屋と簡単に呼ばれることのほうが多い。

そんな家に生まれた夕鈴だったが三人兄妹の中で唯一人、幼少の頃から不可思議なものに対する力は微塵も開眼することなく極普通の一般人として生活していた。

幸い、跡継ぎである兄の雅^{みやび}が強くその素養を引き継ぎ慧眼を果たしたため夕鈴は古い家で肩身の狭い思いをせずに済んでいた。

それどころか、早くに母を亡くし家の中で唯一の女児ということもあり甘やかされて育ったため少々危機管理能力に乏しいところがあった。

この日もそんな夕鈴の暇つぶしによって幕は開かれた。

先祖代々護ってきた家は広大で蔵も幾つか敷地内に点在していたが一箇所だけ封印の住処とされ当主とその許しを得たものしか近づいてはいけなさとされていた場所だ。

「今時、鬼とか妖怪とか、幽霊とか……そんなのないよねえ。最近じゃ怪奇特集すら見ないっていうの」

夕鈴は蔵の内部に溜まっている、重い空気を払うようにぶつぶつと独り言を溢しつつ、何とか暗闇に慣れてきた目を凝らして古臭い壺や鏡……巻物などが入っているのだろう桐の箱などを手に取り品定めをしていた。

別に用事があったわけではない。本当に唯の暇つぶしだ。

今では歴史の教科書の中で暗いしか見ることのかわらない品物はどっというわけか夕鈴の心を捉えて止まなかった。

「あの辺りは、まだ見たことなかったなー」

—— ……逢魔が時。

それは一日のうちでほんの僅かな時間だ。

夕鈴は綺麗に積み上げられている桐の箱をどかしながら探索を続ける。そして、その奥から小さな扉を発見した。

恐らく元々は隠し扉だったのだろう。

扉に掛かった錠前も朽ちてだらんとぶら下がっているだけになつてしまっている。

夕鈴は良いものを見つけたとばかりに、観音開きのその扉に手をかけて、壊さないようにそつと開く。ぎいつと蝶つがいが軋む音と共に開かれた先には陶器の壺が鎮座していた。

他には何もない。

恐らくこの扉自体この壺のために用意されていたのだろう。夕鈴は、それに手をかけてよいしょと唯一広くなっている蔵の中央まで運んだ。蓋には十字に札が貼つてある。

そして、親切丁寧に

『夕鈴へ これだけは開けないように』

と書かれている。

その達筆は間違いなく父のもので、父には何度もここへの出入りを厳しく注意されていたことを思い出して夕鈴は眉を寄せ、苦い顔をした。

「開けるなつてことは、開けても良いよつてことなんじゃないかな
ー？」

夕鈴は、父の添え書きをばいっと外して、あとから元に戻せるようにと、そーつと慎重に札を剥がしていった。

きつちりと壺の上部に貼り付けられているように見えたが、夕鈴がかりかりと札の隅を引っかくと簡単にぺらりと剥れた。

—— …… よしっ！

心の中だけで叫んだ夕鈴はそのまま札を上へ持ち上げる。

「—— …… え？」

札を全て取り除いたと感じたその瞬間。

僅かに保っていた視界は完全に絶たれた。

夕鈴は慌てて辺りを見回したが出入り口も明り取り用の窓もここにあるのか分らない。しかし、扉は背にしていたはずだ。夕鈴は慌てて立ち上がろうとしたが驚きに腰でも抜けたのか、かくんつと膝から落ちて立ち上がることが出来なかった。

父か兄。誰でも良い。

その名を呼びさえすれば直ぐに助けに来てくれると思っていたのに、いざという時に限って声が出ない。

靈感など皆無に近い夕鈴にもこの状況が尋常でないことくらいは分かった。視界を奪うほどの闇。闇を支配するのは鬼だ。

季節は冬を間近にしていたため、肌寒さを感じていたのに今辺りを包んでいる空気はとても濃密で重く身体にじつとりと纏わり付いてくる感じがする。

夕鈴が緊張にごくりと喉を鳴らすと、直ぐ傍で「ふわああ」とやる気のなさそうな欠伸が聞こえた。

「小娘か。ワシを起こすような呆気^{ほうけもの}者は……あれほど起こすなといっておったのに、面倒くさいことこの上ない」

気だるさを隠すこともなくそう告げた声はすれど姿は見えず。

「だ、誰よ……。誰か、居るの？」

震える声が情けなかったが、ようやく声が出たことに夕鈴自身僅かに安堵した。

「なんじゃ……。夜目も利かぬ体たらくか。この程度の闇の中で彷徨うとは余ほど未熟と見える。人が見るのにどれ程の明かりを要するのだ？ 分からぬ……。この程度か？」

声の主がそこまで口にすると辺りは突然の光に包まれて夕鈴は慌てて目を閉じた。

「目を閉じては何も見えぬぞ、小娘。目を開けよ」

「開けられるわけないでしょっ！ まぶしっ！ 眩しすぎるのよっ！！」

片手で目を覆い空いたほうではたたと空をかいた夕鈴に声はなるほどと納得すると「陽の目だけで良いのだな」呟いた。

目を閉じていても感じた強い光がなくなると夕鈴は恐る恐る瞼を持ち上げた。

「子ども」

箱を開けた時と同じようにその場に座り込んだままの夕鈴の目に飛び込んできたのは和服姿の少年だった。

先ほどまでの言葉遣いから恐らく老齡のアヤカシを想定していた夕鈴はなんだと肩を落とし、ほっと息を吐く。

「娘。名は何だ？」

その声からやはり同一人物だと納得した夕鈴はふてぶてしい少年に眉を寄せる。

「自分から名乗ったらどう？」

「先に名を聞いたのは娘だろう？」

いわれてみればその通りだ。

夕鈴はどちらかが先に名乗らねば話が進まないだろうと確信し、よろりと立ち上がりスカート裾についた埃を叩きながら告げた。

「夕日の夕に、鈴。夕鈴よ」

それと問い返せば、目の前の少年は「そうか」と頷いただけだった。

苛立たしげに夕鈴が「名前はっ！」と口にすると少年は子どもらしくない切れ長の瞳で夕鈴を見上げて「鬼だ」と告げる。

「鬼って、鬼は鬼でも、名前くらいあるでしょ？ 赤鬼とか青鬼とか……ってそれは名前じゃないか？」

「夕鈴が勝手につければ良い。ワシは封印を護りし鬼だ。夕鈴が封印を解いたのだ。ワシは夕鈴に従うしかない。それにしても非力な娘だ。何故、このような非力なものに封印が解けたのだ。綻び始めていたのか？」

ぶつぶつと口にいる鬼に夕鈴はストップをかけた。

「私につて、ポチとかタマとかつけられても良いっていつの？」

「呼びたければ勝手にしろ。呼び名など何でも構わん」

いや、そこは突っ込もうよ。

という夕鈴の意図には微塵も気が付くことはなく鬼は足元を確認するように見たあと辺りをきよろきよろと見回した。

どこからか吹き込んできた僅かな風が鬼の髪を揺らしちらりともめかみより僅かに上の部分に二本の角が覗いた。何か探しているのかと夕鈴が問えば鬼は首を振り「ワシには見付けることは出来ん」と溜息と共に溢す。

夕鈴はその姿にほんの少しの憂いを感じて、心の奥がちくりと痛んだ。その心の痛みを察したように夕鈴の顔を覗き込んできた鬼は瞳を細め口角を引き上げた。

「夕鈴が探すのだ。夕鈴は封印を解いた時からワシの主。それにしても非力過ぎる。雪杜家ゆきもりの力はここまで長い年月の間で衰退したというのか？」

嘆かわしいと続けた鬼に今度は夕鈴が眉を顰める。

「私は無力かもしれないけど！ お父さんやお兄ちゃんたちは凄いのよ！」

私を基準にしないでと憤慨した夕鈴に鬼は面倒くさそうに頭を掻いて「どうでも良い。親兄弟がどうであれワシの主は夕鈴だ」と溢し、再び何かがたごとと物色し始めた。

今度の探し物は直ぐに見付かるものだったのか、鬼が見付けて夕鈴の元に戻ると手には一振りの刀が握られていた。

紫の月

妖刀と呼ばれているような品であることは、この場所にある以上確かだ。

夕鈴は駄目だと口にしながら、鬼は取り合うつもりはないらしく「ワシの物だ」といつて、すらりと刀を鞘から抜き出す。

鬼の低い身長では、刀を構えることも難しそうに見えるが、かちやりと抜き身を返し僅かに差し込んできていた外光を反射させる。その明かりは既に月明かりのみとなっていたようだ。

柔らかく注ぎ込んでくる月明かりが刀身を艶めかしく煌かせ刀自身はその光を飲み込み自ら光を放つような美しさだった。

「綺麗」

「当然だ」

キラキラと月明かりを反射させたあと満足そうに頷いた鬼は、その刀を夕鈴に向けた。

「ちよっ！　ちよっと待つて、いや、色々ごめんっ！　でででも、いきなり殺すことはないんじゃない？」

わたわたと、鬼から後退さった夕鈴に鬼はその顔に疑問符を浮かべたが直ぐに合点がいったのか「案ずるな」と口にして夕鈴との距離を縮める。

月明かりを浴び、闇と同じ色をしていたはずの瞳は紅く光る。

子どもとは思えない妖艶な笑みを浮かべる鬼の行動は常軌の沙汰

とは思えない。

鬼は逃げ出したくてもそれ以上後退し逃げ出すことの出来ない夕鈴を前に何度か柄を返し、ふむ……と小さく頷くと心底面倒くさそうに嘆息した。

「面倒だがこの身体ではこやつの方が勝るの」

仕方がないと続けたので夕鈴は刀を納めてくれるのかと、ほっとしたのも束の間。次の瞬間夕鈴は目を見開くことになる。

微かに風が不規則な動きをみせ、鬼を中心に巻き上がったかと思ったら、鬼は姿を変えていた。

夕鈴は見下ろしていた視線を上げ鬼を見上げる。

少年が青年へ……。

夕鈴の驚きを他所に鬼は先ほど同じように刀を持つ感触を確認するように、かちゃかちゃと手の中で柄を転がし、良くなったのか満足げに頷いたあと改めて夕鈴を見る。

ぼーっとしていた夕鈴に鬼は切れ長の瞳を細めて、訝しげに夕鈴を見下ろしたあと何かしら合点がいったのか、ふっと鼻で笑った。

「何だ、夕鈴。ワシに見惚れておるのか？ そうじゃな、ワシに惚れぬ女子はおらんからな」

何様？ 俺様？ 鬼様？ 夕鈴は鬼の台詞にひくりと頬を引きつらせた。

確かに月の光を紡いだような銀の髪に紅い瞳は見るものを魅了するだろう。しかし、同時に人ではないアヤカシであることを証明し

ているようだ。夕鈴はふつと溜息を漏らした。

「兎に角邪魔が入らぬうちに済ますべきだな」

――…私の抹殺をつ？！

鬼のひと言に我に返った夕鈴は、ストップをかけようとしたが遅かった。

鬼は徐に刀の刃を左手で包み込み、ぐつと力を込めた。駄目だと止める隙もなく、じわりと滲んだ赤い雫が古い板張りの床に黒い染みを作る。

鬼は顔色一つ変えることなく「少し深すぎたか？」と呟き、一息に夕鈴との間合いを詰めた。

そして血に濡れた手で夕鈴の口を塞いだ。

「っ！！」

驚きに息を詰め暴れたが刀を持ったままの腕が夕鈴の身体を拘束する。

大きな手に鼻も同時に塞がれて呼吸の方法を失った夕鈴は、喘ぐように口を開くと容赦なく鬼の血液が口内へと流れ込んでくる。

「んーっ！ んんっ！！」

空いた手で鬼の胸を押しても叩いてもびくりともしない。勢いで向こう脛も蹴ろうとしたが当たりもしなかった。

「ワシは気が長くはない、早くしろ」

ぐいつと腰を引かれ寄り近い位置へと抱き寄せると、鬼は夕鈴の肩口へと顔を寄せ、ふつと吐息混じりに耳元で囁く。

夕鈴がそれにびっくりと身体を強張らせた瞬間。

——……ごくり……

口内に溜まっていた、特有の香りと味を醸し出す液体を飲み干した。

傷口を舐めるという経験はしたことがあったがこれだけの量を飲み下すということはない。先に感じた鉄分の味は喉元を通り過ぎると妙な甘さを残していった。

夕鈴の口内が空になったのを見届けると、鬼はあっさりと夕鈴の身体を解放した。

夕鈴は、膝に手をあて派手にむせ返り、なんとか吐き出そうとするが一度取り込んでしまったものだ。その行為は徒労に終わった。

「何てことを！」

苦々しく鬼を睨み上げ口にした夕鈴に鬼は軽く肩を竦め「非力なのが悪い」と己の行動を悪びれる風もない。

そして「そろそろだ」と鬼が口にしたのを合図に——……どくんっ！ と夕鈴の体の中で何かが強く脈打った。

その衝撃に夕鈴はがくりと床板に膝をつき両手を付ける。

呼吸も脈拍もどんどん短くなり速くなる。

頭天边から足先……体の隅々まで熱く燃えるようだ。

床に突っ張っていた腕も肘が折れ、埃臭い床に頬を擦り付ける。

息は荒く視界も霞んでくる。

体の内側から死を直感した夕鈴は、掠れゆく視界の隅に自分を見下ろしている鬼の姿を映す。すうつと真っ直ぐ差し込んでくる月明かりを背にした鬼を見て夕鈴は美しいと思い

「死ぬなよ」

不敵にも掛けられた言葉に、夕鈴は無茶いうなよ……と意識を手放した。

そして夕鈴は夢を見た。

とても懐かしく優しく、ほんの少し哀しい夢だ。

『月の綺麗な夜だった。

まるで白夜のように明るく闇に紛れるものたちを浮かび上がらせる。百鬼夜行を指揮するのは一匹の鬼。世を闇で覆うように厄災を振り撒き人々の心に巢食う鬼を目覚めさせた……悪鬼……それを退治する為に立ったのは神の御言を受けし一族の頭首……』

「雅ちゃん、助けてあげて！」

「すずは馬鹿だなお話だよこんなの」

「真人^{まひと}ちゃんは酷い！ 可哀想だよ。だって、悪いことなんてするものもされるのも哀しいよ……鬼さんだけが悪いんじゃないでしょ？」

そうだよね？ 雅ちゃん」

古い古い雪杜家にのみ伝わる物語。

この家に生まれたものは漏れることなくこの話を聞かされて育っていく。

それなのに、夕鈴だけは最後までこの話を語らせたことはなかった。今度こそはと父に願われ雅が本を開いても、いつも軽口で掻い摘んでしか話をしないような真人が相手でも夕鈴は必ず途中で話の腰を折った。

「夕鈴はこのお話は嫌い？」

困ったように雅に問い掛けられ夕鈴は「わからない」と首を振った。

「ただ……すずは、哀しくなるの。とてもとても哀しくなるの。だから、聞きたくない」

いつて、ぎゅっと二人にしがみつけば二人ともどうしようもないなという溜息と共に、よしよしと夕鈴の頭を撫で結局、もっと別の遊びをしようと腰をあげてくれた。

それがいつものことで、こんな夢を見るのは一体いつ以来だろうか？ そして、もう何度目か知れない闇に飲まれる。

「どうしてこんな、こんな無茶を……」

「夕鈴が非力だからだ。ワシの血を欲しがる輩は多い。光栄に思う

が良い」

「光栄、に……って、このまま夕鈴が目を覚まさなければどうする」

もう、三日も眠っているというのに……雅は深い深い溜息とともにそう零して、夕鈴が眠る布団の端にそろえて正座していた膝を見つめる。

あの夜は、雅にとって一生忘れないものになるだろう。

現頭首である玄海^{げんかい}が遠方へと出て自分が留守を預かっているときに起こってしまった不祥事だ。

雅が父の代役で仕事先から戻ると屋敷の中は異常な静けさが支配していた。

秋の頃だ。

日が傾けば虫の一つの声もするだろう。

風が吹けば庭木の一つもさざめくだろう。

しかし全てが静かだった。

現実的には有り得ない真空の中に屋敷がすっぽりと覆われてしまっているような異様さだった。時の頃から使用人たちや普段なら屋敷につめているものたちも自宅へと戻るため、人がないのは頷けるがいつもならいの一番に自分の帰宅に顔を見せる妹の姿がない。

こういうときは決まって悪いことが起こる。

「夕鈴ー？ 真人ー？ 居ないの？」

まるで意図的にその場所から遠ざけられているように、封印の住処のことは頭に浮かばなかった。

そして、月が足元を照らす頃、古武道を教えている真人が外稽古から戻り、中の様子の異様さに気がついた真人が合流したところであつた一つの答えに行き着いた。

慌てて離れの蔵へと駆け込んだ二人が見たのは月明かりの下佇む一匹の鬼と、血まみれで床に伏している妹の姿だつた。

目覚め

「雅、明日も仕事入ってるんだろう？ 飯食つとけよ」

何度も何度も脳裏に蘇ってくる姿に背筋が凍る。

仕事柄血を見ることも多い。

しかし、それとこれは別問題だ。

封印を解放してしまうまで夕鈴は唯の一般人だった。人外などと世間から一線引かれてしまう自分たちとは違って、夕鈴だけは普通の人としての幸せを歩むはずだった。

だからこそ自分たちにはないものを得ることが出来るだろうと、それが夕鈴であったことを皆幸運に思っていたというのに……。

「聞ってるのか！ 雅！」

痺れをきらせた真人に怒鳴られて雅はやっと気がついたとばかりに肩を跳ねさせた。

そして、襖戸の前にエプロン姿で立っていた真人に「ごめん」と短く詫びた。雅はどうしても家に居る間は夕鈴の傍を離れられなかった。

食事を口に運び咀嚼することすら面倒になっていた。

そんな雅に真人は溜息を重ね「栄養剤作ってやるから、それだけは飲めよ？」と告げ、その言葉に再び謝罪を重ねた雅にもう一度溜息を重ねる。そして、周り縁に続く障子戸を開け放ちぼんやりと月を眺めていた鬼にも同じように声を掛けた。

しかし、鬼は振り返ることもなく告げる。

「何度も同じことをいわせるな。ワシは主の許しなければ動かん。それに、空腹はもうとんと感じぬから良く分からね」

真人はその答えに「ああ、そーですか」と苛立たしげに答えて、ぱんっ！と襖戸を閉めたが、直ぐに少しだけ開くと「もう直ぐ親父が戻れるらしい」と雅に告げた。

雅は僅かな喜色と憂いを浮かべ、こくんと頷いた。

「夕鈴、目を覚まして、お願いだから……」

僅かにも握り返すことのない手を握って雅は殆どうわ言のように繰り返す。

—— ……お願い、お願いだから……

そして、その願いはまだ聞き届けられない。

情けない声と姿に痺れを切らせた鬼はすつくと立ち上がり無遠慮に部屋の中へと入り雅の正面へどっかりと腰を降ろした。

形は最初に蔵で見たときとは違い、十歳前後の子ども^{なり}のようではあったがその存在感は圧倒的だ。雅は素直に眉を寄せ「何？」と警戒色を示す。

「夕鈴は目を覚ます。雅や真人ならまだしも、夕鈴ならば血を受け入れる」

「どうしてそんなこと」

はつきりと口にする鬼に雅は困惑気味に問うと、鬼は不敵な笑みを浮かべ、そんなことは簡単だと続けた。

「夕鈴は非力だからだ。自らの力だけでは己の能力すら引き出せぬほどの無能力者だからじゃ」

「夕鈴をそんな風にいうのはやめて欲しい」

はつきりと怒りを浮かべてそう口にした雅に、鬼は呆れたように片方の眉を上げた。

「夕鈴も同じことをいった。ワシに、親兄弟を馬鹿にするなど……血は争えぬものだな」

そして、一つ嘆息して「まあ良い」と頷くと、そつと夕鈴の額に小さな手を添えた。

「さて、何処で迷い子になっておるのかの……」と呟くと静かに瞼を落とし意識を手のひらへと集中させた。

—— …… 夕鈴。

静閑なる夕暮れ時に玲瓏と鳴り響く鈴が如く在る、我が主。一筋の光も見出せぬ漆黒の闇。僕^{しもへ}たる封印の鬼が此処に焰を灯す……。

それは言葉ではなかった。

音として発せられたものでもなかった。

しかしハッキリと雅の耳には届き、夕鈴の心には響いた。

「—— ……ん」

静が動に変わる瞬間、雅は慌てて膝を立て夕鈴の肩を掴み名を叫

んだ。

「夕鈴っ！ 鈴ちゃんっ！」

「……………」

ようやくと瞼を押し上げた瞳は天井をぼんやりと見つめたまま、
的を得ない。そしてもう一度、雅に名を呼ばれた夕鈴は、はっ！
と数回瞬きをし肩に掛けられた手を見たあとその先へ視線を向けた。

「雅、ちゃん……………」

暫く音を発しなかった唇は乾き、声も掠れていたが確かにそう告
げた夕鈴を雅は掻き抱いた。

そして、何度も何度も夕鈴の名を呼ぶ声は最後には涙に掠れてい
た。昔から雅が一番の感動屋だったのは今も変わらない。

その様子に呆れたように嘆息した鬼は再びそつと腰を上げ周り縁
へと出て月を仰ぐ。

雅の声にばたばたと走って駆けつけてきたのだろう、賑やかな足
音と共に襖戸を開いた真人は、雅に抱き締められたまま苦笑してい
た夕鈴と目が合って、かくんつとその場に膝を折った。

「おそよー……………」

前髪を掻き上げて力なく口角を引き上げそう告げた真人に、夕鈴
は「うん」と頷いたあと、雅の背を大丈夫だというようにそつと撫
でた。

暫らくして夕鈴が圧死するまでに腕の力を緩めた雅は、そっと夕鈴の顔を覗き込み泣きそうな声で問い掛けてくる。

「鈴ちゃん、どこも痛くしてない？ 気持ちが悪いか、吐き気がするとか……三日も寝てたんだよ！ 大丈夫なわけないよね？」

夕鈴は苦笑して「圧死するところだったけど、もう大丈夫」と答えた。

その様子を眺めていた真人に夕鈴はにこりと微笑んで「真人ちゃんにも心配かけちゃったね」と肩を竦めた。

「俺は別に……雅ほどじゃねーよ」

気まずそうに頬を染めてそう答えた真人に、夕鈴は笑みを深める。

「紫月しづきは月が好きなの？」

なんとか首を捻って縁側にいた鬼を見てそういった夕鈴に鬼はぴくりと反応し夕鈴を見た。

「ポチかタマになるかと……」

「あれは冗談だよ」

意味ありげに微笑みあつた二人の間を割るように、真人が夕鈴の頭頂部を「和んでる場合か！」と小突いた。

痛いと眉を寄せた夕鈴の頭を「駄目だよ、お味噌が減っちゃう」と撫でる雅に真人だけでなく撫でられている夕鈴も肩を落とした。

明けの明星が空に煌く頃。
頭首である、玄海は屋敷に戻った。

とりあえず、話に聞いていた夕鈴が目を覚ましていたことには胸を撫で下ろし、皆の眠気さえ覚めていれば直ぐにでも話をしたいという願いに答え、先に報告をするために雅が広間に入り、時間を置いて真人と夕鈴が足を運んだ。

もちろん、紫月も面倒臭そうではあったがついて入った。

最後に入ってきた紫月の姿を見て玄海は、僅かにきゅつと下唇を噛んだが直ぐに三人に座るように伝え玄海は座った三人の顔を確認するように順番に見た。

夕鈴はこの雰囲気が苦手で僅かに眉を寄せる。
小さな頃から悪戯をして説教をされるときは大抵こういう状況だったのだ。普段は優しい父が、この広間の上座に座っているときだけはいつもと違って見えるのもそのせいかもしれない。

「話は雅から聞いたよ。でもね、夕鈴。お前の口からもちゃんと聞きたいんだ」

静かにそつと告げられ、夕鈴は逡巡する。

まるで悪戯を隠す嘘を探している子どものように瞳を彷徨わせる夕鈴に玄海は厳しい目元を下げ、優しい笑みを作った。

「確かに蔵への出入りをお前に許した覚えはない。だがね、今はそんな瑣末なことはどうでも良いのだよ。私は唯……アレにはちゃんと開けないように念を押していなかったかな？」

ちらりと夕鈴の隣に胡坐を掻いて退屈そうにしている紫月に視線を送ってから、夕鈴を見た玄海に夕鈴は再び気まづくなった。

きゅっと夕鈴は口を引き結んだのにその声は聞こえた、

「開けるなつてことは、開けて良いよーってことだよな」

慌てて、隣を見た夕鈴に紫月はにやにやと口角を引き上げる。

その言葉に、玄海はほう……と興味深そうに片方の眉を挙げ、雅と真人が、はあ……と嘆息した。

「ちよっ！ もう、黙んなさいよっ！ 馬鹿っ！」

「ワシは起こされて機嫌が悪い。夕鈴が語らぬならワシが口を貸してやったまでだ」

ばしばしと紫月の膝を叩いた夕鈴から、紫月はすっと除けるとぷいっと外のほうへとそっぽを向く。

「夕鈴」

「は、はいっ！」

そつと静かに声を掛けられ、びくりと肩を跳ね上げた夕鈴は恐る恐る玄海のほうへ向き直る。

父の表情からは怒りとも悲しみとも取れぬような色が浮かんでいた。夕鈴はその姿にしゅんっと肩を落とし「ごめんなさい」と身体を小さくした。

はあ、と落とされた父の溜息が重い。

「夕鈴は封印の理を理解していなかったな」

「申し訳ありません。頭首。私が怠っていたのです」
「それなら、俺……あ、いや、私も同じです」

雅が畳に拳をつき頭を下げるのと同時に、真人も同じように下げた。

この場所では頭首と対峙しているものの距離は遠い。
如何に手を伸ばせば届くのではないかという距離に居たとしても……だ。雅は、父を『頭首』と呼びいつもの穏やかさを緊張させるし、真人は普段使い慣れない一人称に敬語を添える。

不似合いにも程があると夕鈴はずっと違和感を覚えていた。

しかし、鬼の血を飲み何かが変わってしまった今なら分かる。

玄海は他の追隨を許さないほどの力を内包して見える。それは畏怖さえ感じるほどだ。蔵で、一度紫月が姿を変えたときに感じた威圧感に酷似している。

口を挟むことすらはばかられる雰囲気を押して二人とも声を出した。夕鈴を庇う、ただそれだけのために。

「今責任がどこにあるかと問質といただしているわけではない。雅も真人も面を上げる」

苦笑した玄海に夕鈴はごめんなさいと短く重ねた。

そんな夕鈴にも微笑んだ玄海は「こっちにおいて」と夕鈴を手招きする。夕鈴は招かれるままに膝頭同士がぶつかるほど近寄った。

玄海はそつと利き手を上げて反対の手で着物の袖を押さえると、そつと夕鈴の頭を撫でた。ゆっくり優しく愛しそくに……。

「何かがあることは予想していた。これもまた、予想の範疇の出来事といっても過言ではないだろう。だけど、私は可愛い娘には荷が重過ぎると正直思うよ」

ふう、と玄海が吐いた溜息に夕鈴はしゅんつと頭を擡げる。

「夕鈴は、彼に名を与え……彼は夕鈴に自らの血を分け与えた……契約は成され、満たされてしまった」

「え？」

「夕鈴はこれから解いてしまった封印を復元しなければならない。そこに座している封印を護っていた鬼……名を紫月……だったかな？ と、共に、な」

ちらりと皆が紫月のほうへと視線を投げたが、紫月は特に気に留めるでもなく何の反応も示さなかった。

「え、ええつと、お父さん、話が見えない……」

おずおずと口にした夕鈴に玄海はにつこりと微笑み「そうだな」と頷くと視線を夕鈴の斜め後ろに居た雅に向けた。

「最初の欠片の場所が特定するまでに、必要となる知識は雅が与えてくれるだろう」

突然ご指名を受けた雅は、刹那きよとしたものの直ぐに「承知しました」と頭を垂れた。それに頷くと次は真人のほうを見る。

真人はぎくりというように肩を強張らせ、微かに膝を引いた。

「そう警戒するな。真人は、力のコントロールを教えてやるように。」

最低限身を守ることが出来るように……護身術も兼ねて……」

「いや、でも、無理、夕鈴に護身術って、こいつ」

わなわなと震える指で夕鈴を差した真人に玄海は笑みを深めて噛み締めるようにゆっくりと名を呼んだ。

「真人」

その声色にはノーといわせる力はなく。真人は、くつと息を呑み畳に先程と同じように拳をつけて頭を下げた。

「……っ……承知しました」

日常

それでは下がりなさい。と、の玄海の台詞で広間をあとにした面々が廊下に出ると、夜は明けてしまっていた。

ちらりと真人がポケットからケータイを取り出してみれば六時前だ。

先程まで全く眠気を感じていなかったが、その時間を目の当たりにして、ふわああ。と出てくるあくびを隠そうともしない。

「つかさー……こういうのは紫月がやれば良いんじゃないの？ 主の能力不足は僕が補えよ」

本当に面倒臭そうにそういった真人に紫月は「断る」即答だった。

「ワシは面倒ごとが嫌いじゃ」

「僕にもっと時間が取れば、全部請け負って上げられるんだけど……でも、父さんもいったように真人は適任だと思うよ？ 子どもたちにも大人気だし」

にこにこ続けた雅に真人は「適任かどうかっつーより、親父の命令は絶対だろ」と派手な溜息と共に頭を掻く。そして、全員の話題の中心である夕鈴はやや思案したあとぼつりと零す。

「……雅ちゃん、それはようするに私は子ども相手と同レベルということ？」

その瞬間三人とも視線を逸らした。

—— ……息が合いそうで良かった……。

夕鈴は物凄く物申したいところではあったが、自分が人並み以上の身体能力を持ち合わせていないことも重々承知している。

学校の授業以外の運動だって特にしていない。

そんなド素人に教えるとなれば、確かに子どもに教えるよりも難しいかもしれない。否定できない事実のほうが高く、夕鈴は言葉を飲み込んだ。

「それはそうと、鈴ちゃんはまだ眼が覚めたばかりだし学校はお休みしたほうが良いんじゃないかな？　僕が出掛ける前に電話しておうか？」

につこりと先程までの空気はなかったようにそう切り出した雅に、真人が直ぐに「じゃあ、俺も欠席で」と乗っかるが、あっさり無視された。

夕鈴はくすくすと笑いつつ「行くよ」と頷いた。

そんな夕鈴の言葉に雅は心配そうに大丈夫？　と重ねたが夕鈴が平気だと頷けばそれ以上は念を押したりはしなかった。

本当は大丈夫かどうか夕鈴自身微妙だった。

一応鏡の前に立って直ぐに角とか生えてないか確認した。

これは大丈夫だった。牙もなかった。

上の兄弟二人のように何か特殊能力で破壊活動とか出来ないかとやってみたが、枕もとの水差し一つ、コップ一つ動かすことは出来なかった。

あんな妙なものを飲まされたのだ、それに加えてあの衝撃を考えれば何か変わっていて当然のはずで、変わらないのがおかしい。

夕鈴はそちらのほうへ違和感を感じていた。

そのことを紫月に問うても、分からないならそれで良いといわれた。なんにも良くないと怒っても僕はあまり主に忠実ではないようだ。

夕鈴が寝込んでいた間は静かだった家の中は、数日のうちにいつもの騒がしさが戻ってきた。

玄海は何かしら仕事の都合で家を空けることが多く、今回も雅、紫月と方向性がある程度固まったからとその下準備だといいたまた家を空けてしまった。

その相談のときにももちろん夕鈴も同席していたが、話の半分以上理解出来なかった。

困惑してしまっていた夕鈴に紫月は呆れたような顔をし、雅は「おいおい説明してあげるからね？」と慰めた。

「おい、まだ用意出来ないのか！ 置いてくぞー！」

「ちょ、ちょっと待って真人ちゃん。髪が上手く結べない」

「ったく。ちゃんはやめろっていつてるだろ？ こっち来いよ、直してやるから」

ばたばたと玄関まで走ってきた夕鈴に眉を寄せた真人はぶつぶついいながら、ちょこんと自分の前に腰を降ろした夕鈴の髪を緩く編みなおし左右対称に揃え縛った。

真人は荒っぽい言動とは対照的に、細かい作業が昔から上手い。出来たぞ。と、背中を押されて立ち上がると夕鈴はありがとうとにこにこして、靴を履く。

「お嬢様っ！ お弁当お忘れですよ！」

通いの使用人が慌てた様子で追い掛けてきて、そうだったと夕鈴は包みを受け取り肩から掛けたバッグに仕舞いこんでようやく家の門を潜ることが出来る。

夕鈴は徒歩三十分程の公立の高等学校に通っていた。

偏差値が異常に高いということもなく凄い人数が通っているというわけでもなく、雪杜家の人間が通うにしては些か普通すぎるくらいだが夕鈴はこの学校が気に入っていた。

小さな頃は選ぶことも出来ず、私立の大きな学園に入れられていたがそこでは雪杜の名がとても重くて、名前しか持ち合わせていない夕鈴には特に窮屈に感じられていた。

その点、今の学校では雪杜の名の重さを本当に理解しているものなど無に等しく、皆普通に接することが出来る。

「おはよー」

「今日も仲良く真人ちゃんとご登校？」

「良いな。あたしも一緒に登下校したい。あたしをお義姉さんって呼んで良いよ」

「いや、あんたを嫁にはいらないでしょ」

雪杜兄弟は家名とは別なところで有名ならしい。

夕鈴は友人たちのやり取りにそうなったらきつと楽しいよねと笑った。

夕鈴にとってこれが普通でこれからも続く普遍のものだと思って

安心しきっていた。

—— …… それなのに……

夕鈴は窓際の自分の席へ鞆を置き、夏の緑から秋の赤へと色を変えていく運動場脇に植えてある広葉樹を見、一つ溜息。

教室の中の喧騒がどこか遠いところのように思える。

「夕鈴？　どうかした？　お腹空いた？」

ぼんやりしている夕鈴の顔を覗き込んでそう訪ねてきた優衣に我に返り、大丈夫だよと首を振った。その会話に気がついた真奈美が後ろの席から身を乗り出してきて話に加わった。

「何？　夕鈴お腹空いてるの？　わたし今朝コンビニで新作のロールケーキ買ってきたんだけど朝からいつとく？」

いや、だからお腹空いてないよ。と、苦笑しつつにこにこ買い物袋を出してきた真奈美の手を止めた。

そして本鈴が鳴り響きわらわらと皆が席に着けば担任がSHRを始める。

何の変哲もない日常が今日も始まる。

夕鈴は自分には家柄的な能力はまるで身につかなかったものこのうしてみると家族一つとってもそうだがクラスメイトなどをとっても人には恵まれていると思っていた。

だからとても居心地が良かった。

それなのに自分が招いたこととはいえ、この地を一時でも離れな

くてはいけなくなるとは思ってもみなかった。

「封印の欠片を回収しなくてはいけないんだよ」

「え、誰が？」

「封印の鬼とその主が……」

まず最初にそう告げた雅の台詞だけで夕鈴は頭が追いつかない。そして直接的な名を伏せた雅に夕鈴は益々眉を寄せ疑問符を浮かべる。そんな夕鈴に雅は哀しそうに微笑んで「ごめんね」と頭を撫でた。

「本当なら僕が変わりにいつてあげたいんだけど、紫月が認めた主は残念ながら夕鈴なんだよ……。だからこれは夕鈴が行かなくちゃいけない、封印を解くことが出来た夕鈴が封印を元の形に戻さなくてはいけないんだよ」

「私がどこへ？」

「消えてしまった欠片を集めなくてはいけないんだ。それが在る場所を今僕も頭首も絞り込んでいる最中。最初の欠片があればきっと次の欠片を呼ぶからそんなに難しくはないと思うんだけどね……」

ゆっくり穏やかに話を続ける雅に夕鈴はふんふんと頷きながら

「つまり、私に取りに行けば良いんだよね？ その欠片……欠片つて、もしかしてあの壺かな？ そういえば開けて紫月が出てから見てないよね」

割っちゃった？ と首を傾げた夕鈴に傍で新聞とか読みながら聞いていた紫月が嘆息する。

「封印は八つに分かれた。ワシは別に回収しようとしまいとどちらでも構わん。構わんが、ワシが封じていたものは百鬼夜行を起こす基じゃ。百鬼夜行の行も知らんのか？」

本当に役に立たん無能力者だと嘆息した紫月に、夕鈴は膨れたが、ふと思い出したのか紫月の顔を覗き込む。

「……もしかして、探し物ってそれ？ 紫月では見つけることは出来なくて、見つけるのは私だといっていたそれ？ じゃあ、どっちでも良いとか可愛くないこといいながらも、最初から紫月は探す気あつたんでしょう？」

素直じゃないんだから、とこつんと額を弾かれて紫月は「ワシに気安く触るな！」と怒鳴って部屋を出て行ってしまった。

あらら？ とその後姿を見送った夕鈴に雅は「続けようか？」と話を戻した。

そのあととりあえずの話を聞かされ、自分がやってしまったことへの尻拭いだとある程度の覚悟は決めたものの、日常がこうもいつもと変わらず穏やかであるとそのぬるま湯から出るのはとても辛い。

夕鈴は誰にもばれないようにこそりと溜息を吐くことが多くなっていた。

校庭の葉が色付き枝ばかりになる頃には、自分がこの場所に居ないのが普通になってしまっていることだろう。

川の流れのように留まることのないときの流れの中では、日常の

些末な変化など仕方のないことではあるもののこれまであの家を出たことのない夕鈴にとってはとても大きな変化だった。

真人

秋口の空は高く、吸い込まれそうなほど美しい青だ。
うつすらと掛かる雲すら空の色を映し青く見える。

夕鈴は普段なら皆で過ごしている昼休み、その輪から逃げるように抜け出して屋上に出た。

ここは立ち入りが制限されているため授業が絡んでいたりしないかぎり生徒が近寄る場所ではなかった。

そんな人影のない場所は物思いに耽るには持つて来いだと思って夕鈴は立ち入った。

制限がある割りに施錠もされていない重たい鉄の扉を開き、ぱんと風にあおられて開ききってしまった扉に慌ててしがみついて、がたんつと閉める。

ばさばささとスカートの裾があおられるのを片手で押さえ、風除けになりそうな場所を探す。

そして明り取り用のドームの端へ腰を落ち着けた夕鈴は空を仰いで一つ深呼吸してから片手に持つてきた本を開く。

「お前さ、何やってんの？」

それとほぼ同時に頭上から降ってきた声に夕鈴は見事に肩を跳ね上げて本を飛ばした。

わたわたたと飛ばしてしまった本を膝を立てて取りに行き、苦々しく背後を振り返る。

「先客が居たとは思わなかった」

驚かされたせいで不機嫌そうに口にした夕鈴に「お陰様で」と、肩を竦めたのは真人だ。まあ、座れよ、と、促され夕鈴は先程の場所に戻り暖かくなったコンクリートに背中を預けた。

「珍しいなお前がこんなとこに来るなんて？」

「真人ちゃんは今連さんの？」

「ん？ 俺は、まあ、常連っていうか俺の保健室だ。うん」

昼寝でもしにきていたのだろう。

夕鈴は呆れたと眉を寄せたが、そんなことは特に気にしない真人は夕鈴の手の中のを、ぱんつと弾いて「こんなもん持ち出すなよ」と呆れた。

「だって、雅ちゃんが時間があつたら読んでおいてっていったしさ。今日は天気も良いし、ここなら人も来ないだろうと思って……あ、もしかして、これ、問題あり？」

背表紙を持つてばさばさとした夕鈴に、真人は慌てたように手を伸ばし「やめろって」と掴まえた。

「問題ありだよ！ 家から持ち出して良いような類の資料じゃない。雅もまさかお前が学校にまで持つてくるとは思っていないと思うぞ」

古い家だけに雪杜家の書庫にはかなり貴重な資料も沢山ある。

夕鈴は自分の手の中のを改めて見る。

確かに、今とは全く違う装丁に、ぱらりと表紙を捲れば中の文字

も墨筆で書かれていて難読だ。夕鈴は今更丁寧に表紙を閉じて「まあ、こういうこともあるよね」と笑った。

「お前さえやらなきゃ有り得ないけどな。それにお前それ読んで内容理解出来るのか？」

「ん？ 出来ないよ。出来るわけないよ。雅ちゃんが説明してくれたらすんなり頭に入ってくるけど……あ、丁度良いから真人ちゃんが説明してよ。どうせ知ってる内容でしょう？」

はいっ、と、手の中の本を差し出してきた夕鈴に、真人は本と夕鈴を順番に見たあと、ドームにもたれ掛かっていた身体を離して夕鈴の隣にどっかり座る。

そして「嫌だ」と簡潔に答えた。

えーっ、という心の声が表情から駄々漏れの夕鈴をちらりと見ても答えは変わらないらしい。

頭の後ろで両手を組んでずりずりと身体を倒していくとお昼寝タイムと聞いたそうだ。

「迷惑は雅に好きなだけ掛けるよ」

ふわーっ、と、欠伸を隠すことなく大口開けてそういうと瞼を落としてしまう。

夕鈴はその様子に一瞬だけ切なさうに眉を寄せたあと、ばしんと本で……貴重な本で真人の額を弾いた。

「ってー」

予想していなかった痛みに、真人は片方の肘をコンクリートの床

に着き身体を支えると開いた手で額を擦ってワザとらしく「何すんだよ」と眉を寄せた。

「残念でしたっ！ 私は真人ちゃんにも迷惑掛けるんです！」

「はあ？」

「雅ちゃんがいったんだからね！ 三人だけの兄妹なんだから迷惑くらい掛けなくちゃ駄目だよって」

だから、真人ちゃんも私に迷惑を掛けられなくちゃ駄目なわけ。分かる？ と、とんでもない話を持ってきた夕鈴に真人は激しく「有り得ねえ」と溜息を重ね「兎に角俺は寝る！」とごろりと夕鈴に背中を向けてしまった。

完全に背中を向けたりそっぽを向いたりするのは、照れたときの真人のクセのようなものだ。

それが分かっているから、お願いをきいてもらえなくても夕鈴は満足な気分になって自力で読解することにした。

雅と夕鈴は今の頭首玄海の実子であるが、真人は違っていた。

真人は分家筋の末席に突如生まれた異能力を持った子で、本人は力を持て余し、その対応にも困った真人の母親が良く本家に連れてきていた。

だから本当に雅や夕鈴とは兄妹のように育った。

そして、唯一理解しようと努めていた母親が死去したあと婿養子に入っていた父は人とは異なる真人の面倒は見られないと家を出て行き、真人は一人になってしまった。

そのあと三人は紙の上で正式に兄弟になった。

多少揉めたとすれば、同じ学校に通うことになった真人が、同じ年に生まれたのにどうして自分と学年が違うのかと不貞腐れた夕鈴を宥めることくらいだ。

それ以外のことでは頭首が決めたことは絶対であつたし、雅と夕鈴は喜んで真人を迎え入れた。

だが、本人の心中は穏やかではなかつたようで、真人は暫く誰とも口を利かなかつた。

しかし、絶対的な養父との力量の差と何より雅のお人よし加減と、夕鈴の迷惑製造マシンの事後処理に奮闘する雅の気の毒さ加減に結局は真人が折れざるを得なかつた。

それでも時折、距離を置こうとする真人を雅も夕鈴も見逃したりしない。

そのことを真人自身がどう感じているかは分からないが、迷惑がられているかも知れないなと少しは夕鈴も思うもののきつと愛情確認だろうと勝手に納得し気を遣つたりはしなかつた。

「……夕鈴。それ、ちよつと貸せ」

真人は、ふ、と、何か思いついたのかひょいと足で反動をつけ起き上がると、夕鈴の手の中から本を抜き取り、ぱらぱらと捲る。

本の内容は本家のものならば誰でも熟知しているはずの百鬼夜行についてだ。

ぴたり、と、ある頁で手を止めた真人の手元を覗き込むようにして顔を突き出してきた夕鈴を微妙に避けてから真人は本の文字を目で追っているようだ。

—— …… 解き放つもの封ずるもの 常に 同一の …… 調和を乱す
…… もの …… ——

「ちつ。原書は読み辛いことこの上ないな。要所要所が掠れてるし
……」

意図的じゃないと良いけどな、と、本当に小さな声で付け足した
真人の台詞は強い風に攫われて夕鈴の耳には届かなかつたらしい。

「なんていったの？」と見上げてくる夕鈴に真人は「雅ちゃんに
聞け」と本を閉じて夕鈴の頭に押さえつけ立ち上がった。

「お昼寝は？」

「止めだ止め。邪魔が入っただろ」

涼しげな空に両手を突き上げて伸びをしながら真人は昇降口へと
歩いていく。

その後姿を見送っていた夕鈴に「早く来い昼休み終わるぞ」と扉
を押さえて開いた手をひらひらと振った。

長く続く階段を真人の後姿を追いかけながら下り降りていた夕鈴
が「真人ちゃん」と声を掛けると「ちゃんはやめろ」と口にしてか
ら「真人」といい直した夕鈴を見上げる。

「今日はどこの部活も助っ人なし？」

「全部断ってるよ。親父様の命令は絶対だろ？」

「命令じゃなくてもお願いだよ。どうしても嫌なら、私一人で頑張る
から良いよ？ みんな真人ちゃ、えーっと、真人のプレイ楽しみに
してると思うし」

普通の人間より運動能力がずば抜けている真人は、運動部の面々

からすれば喉から手が出るほど欲しい人材だ。

だが、家の関係上どこの部にも所属しないと決めていた真人は時間があればという条件で公にはなりにくい練習試合や通常練習には付き合っていた。

「お前、一人って……紫月にでも付き合ってもらうのか？」

口にしたあとでお互い暫し黙し、ないないとばかりに首を振った。

「今もほぼ確実に居間のテレビにかじりついてると思うよ」

「……鬼が、時代劇とか二時間ドラマとかに嵌ると思わないよな……韓流に嵌るオバハンと同レベルだ」

うんざり、というように口にした真人に夕鈴も苦笑して頷く。

雪杜家にあるテレビといえば居間と真人の私室の二箇所なのだが、発見早々紫月が居間のテレビは占領してしまった。

物凄く不思議らしく、物凄く楽しいらしい。

紫月は留守番をしている間、午前中は新聞を地方紙・全国紙・経済紙・スポーツ紙など五社を梯子して昼からは二時間ドラマ——お気に入りには赤い救急車シリーズらしい————それらを網羅、夕方は時代劇を見ている。

大抵その時間に夕鈴が帰宅する。

見終わるまでは何を聞いても主の問いだというのに空返事だ。

「ま、まあ、やるときにやってくれば良いんだけどね？」

「あの重たい腰上がるのかよ、あいつ」

顔を見合わせて、ぷつと噴出したあと「授業遅れんなよ」と背中を叩かれ、夕鈴は真人と別れた。

名を呼ぶこと

その日、夕鈴が帰宅すると部屋には紫月の姿はなく、予想通り居間に居てテレビを見ていた。

ただいまと声を掛けても「ああ」と返ってくるだけだ。

「道場のほうへ一緒にいかない？ 紫月」

「いかん。一人で集中する鍛錬でもしている。夕鈴は集中力が足りない」

折角誘っても夕鈴のほうを見ることもなく告げた紫月に夕鈴は、ああ、そうですかと不貞腐れた返事を返して部屋を出ようとしてふと足を止める。

「ねえ、紫月」

「なんだ。ワシは今忙しい。雅なら今日は早いと和江がいていたぞ」

和江というのは日中留守番兼家事をやっておいてくれる使用人の名前だ。

夕鈴はそうなんだと頷きつつそうじゃなくてねと話に戻し、紫月の傍まで戻ってくるとすとんと腰を降ろしてテレビを見ていた紫月の顔を覗き込んだ。

紫月はようやく眉間に深く皺を刻んで夕鈴を見た。

「紫月ってさ、名乗ってから小娘ーとかお前ーとかいわないよね？」

にこにこ口にした夕鈴の言葉に、紫月は何を突然というように

目を丸くして首を傾げた。

「いや、なんか。紫月って偉そうだし、人を見下してるし、絶対名前とか呼びそうにないのに、結構きちんと呼ぶなと思って、ちょっと感心してたんだよね」

「そうか、夕鈴は命が惜しくないらしい。主を絶つのはこれまでにいが……」

「いや、殺さないで。別に悪いなんて言ってないじゃん。良い子だねえーって話で」

蔵から持ち出した刀をそのまま自分の下に置いている紫月がそれに手を掛けると夕鈴はとりあえず弁解した。

しかしそれが、用を足したとは思えない。

その様子に短く嘆息した紫月は「当たり前だ」と続けた。

「何故、主が鬼に名を与えと思う？」

紫月の問い掛けに夕鈴は「んー？」と首を捻って「呼ぶのに不便だから」と続けた。

有体というか意味など考えることもしなかった、とばかりにそういった夕鈴に紫月は目を細めてワザとらしく溜息を吐く。

「縛るためだ。世の全てのものは名で縛られる。特に名を与えたものに強い拘束力を与える」

ワシがわざわざ名を呼ぶのはそのためじゃ。と、締め括って紫月は再びテレビを見た。

そして、良い場面を見逃していたらしくぶつぶつと文句を垂れる。

夕鈴はそんなこと微塵も気に留めることなくうーんっと唸って話

を続ける。

「……てことは、紫月は頼みを聞いてもらつたために名前を呼ぶんでしょう？　だったら、どうして私のいうことは軽く流しちゃうわけ？」

ほんの少し不機嫌そうにそういった夕鈴を紫月はちらとだけ見て、あつさり「無能だからだ」と告げた。

「夕鈴にワシを使役するだけの力がないからじゃ。まあ、聞いてやらぬこともないし絶対的に無視することも出来ぬが……今はまだその必要はないじゃろう」

別に良いけどさ、と、むくれた夕鈴に紫月は刹那真面目な顔をして「それに」と続ける。

「命令するときには、問うな」

「え？」

「命ずるのに問う必要はない。夕鈴は常に問い掛けるだろう？　命令とは常に決定事項だ。僕に選択する余地は必要ない。ワシはそれに迷うほど弱くはないが……これは主の安全のためでもある」

その身に刻み忘れるな、と、真っ直ぐに見つめてそう告げた紫月の迫力に夕鈴は「分かった……」と頷いたものの、納得したというわけではなかった。

もとの温厚な気質の夕鈴には、誰かを束縛し命令を下すというのはいふなれば性に合わないといったところだろう。

他人に対する厳しさを持ち合わせていない夕鈴には、兄二人のよくな強さもない。

主従関係も友人関係となんら違いはないと思ってしまっただ。

そんな複雑な表情をしたままの夕鈴に紫月は「気にするな」と告げ苦笑したあと、ふと思いついたように顔を上げた。

「何故、紫月なのだ？」

「え？ 嫌だった？ 結構良い名前だと思ったんだけど」

にこり、と、微笑んでそう答えた夕鈴に紫月は「なんでも良いとはいったが……」と言葉を濁した。夕鈴はそれを不思議に思いつつもあのねと話を続ける。

「私が蔵で倒れたとき、紫月を見上げたら丁度紫月越しに月が見えたの。それがね、その月明かりが紫月の銀髪の上で紫色に見えてすごく綺麗だったから、もし目が覚めたら紫月と呼んであげようって思ったの」

凄いでしょっ！ と、いわんばかりにそう口にした夕鈴に紫月はふうと息を吐いて「そんな程度のことだと思った」と新しく湯飲み茶を注いだ。

「何？ 駄目だったの？ 気に入らない？ 私は気に入ってるけど」

「夕鈴が気に入っているならそれで良い。名についてワシに介入出来るようなところはない」

「じゃあ、紫月はその前、なんて呼ばれてたの？」

そろそろ行かないと真人が帰ってくる。と、立ち上がりながら問い掛けた夕鈴に紫月はやや黙したあと首を振った。

「記憶にない」

ぽつ……と、そう零した紫月の台詞に夕鈴は首を傾げたがそれがどうしてだか切なく思えてその気持ちを振り払うように「そっか」と笑った。

じゃあ、いくね。と、その場を離れていく夕鈴にやっぱり紫月は着いていく気配はなく、夕鈴は仕方ないなと肩を竦めて道場へと向かった。

ぱたんつと障子戸が閉まる音が消えると、紫月はぴったりと閉まった障子戸を仰ぐ。

「ワシに月を見る……か……」

雪杜家の道場は広く門下を集っているわけではない。

本家筋のものに近いものそして異能力者が、時折その能力を己で見つめて行く場所でも神聖な場所とされている。

そのため、これまで夕鈴は一度もそこへの入室を許可されたことも、入ることを願ったこともなかった。

今でもそこへ足を踏み入れるのはおこがましいような気がして、最初の一步は躊躇する。

「お邪魔しまーす……」

そっと、木戸を開ければ檜の香りが満ち、ぴんつとした緊張感が場を支配している。

今日も誰も居ない。

ここ数年使うのは、雪杜の人間だけ、つまり玄海・雅・真人だけになっていたから人気がないのは当然なのだが……夕鈴はおずおずと入室して、三十畳ほどの部屋の中央に正座した。

室内は無音だ。

直ぐ傍の庭の木がさざめく音も、虫の声も聞こえない。

一種の隔離された空間だ。

格子窓から斜めにさしてくる赤い西日が年季の入っているはずの床を真新しく見せる。

夕鈴は大きく深呼吸して、そつと瞼を落とす。

暗闇の中で意識を研ぎ澄ます。

自分の内へ内へと意識を集中していく。

自分の中にある何かに語りかけるように求める。求める……求める……

「何を？」

思わず声を発し目を開く。

夕鈴はがつくりと手を床に着き肩を落とす。

真人の話では、内側に自分の持つ力を持った者が必ず居てそれと対面しないと力は発動しないらしい。しかし夕鈴はそんな抽象的な説明で何かを実行出来るほどの実力者でもなく徒労に終わる。

はあ、と溜息を吐いたところで「サボるな！」と声が掛かった。夕鈴が渋々後ろを振り返れば待ち人真人だ。

真人は帰宅してそのままこちらに寄ったのか手に持っていた鞆をぽいつ、と、出入り口に放って夕鈴の傍まで歩み寄った。

「遅いよ。真人ちゃん」

「あー、まあ、色々掴ってたんだよ。とりあえず、始めるぞ」

どつかりと夕鈴の正面に腰を落とした真人は利き手をすつと翳した。

それに合わせるように夕鈴は背を正しそつと瞼を落とす。

静かに真人の手のひらが額に当たると夕鈴はそこへ集中した。

真人が触れた場所は暗闇の中でも明かりを灯す。目印があれば集中するのもずつと容易くなる。

「集中集中……」

ぶつぶつと口にする夕鈴に真人は苦い笑いを零すが、それで集中出来るのならば特に問題ない。

ぴんつと張り詰めていた部屋の空気が僅かに揺れた。

ほわりと夕鈴の周りが明るくなる。

「ゆっくり、結界を広げろ…… 堅く緻密な壁を形成するんだ」

「堅く…… 緻密…… 壁……」

口にしないと気が済まないのか真人の言葉を反復する夕鈴の身体を包んでいた光が、変化する…… 変化して……

「ぎゃっ！」

「うわっ！ ご、ごめんっ！」

壁を作った。

一瞬にして形成された壁は夕鈴に触れていた真人を排除すべく、真人を巻き込んで弾いた。直ぐに同じだけの力をぶつけて相殺したものの、既に真人は夕鈴から数メートル離れていた。

「大丈夫？ 真人ちゃん」

慌てて駆け寄ってきた夕鈴に、真人は片方の膝で身体を支えたあとよりと立ち上がると、はあ……と溜息を零し、苦い顔で夕鈴を睨んだ。

「あのな！ 昨日もいったよな？ 壁つていったって、お前のは板切れだ！ そうじゃなくて、自分を囲め。全部囲むんだよ。壁で！ こうだよ、こう！」

いつて真人は足先で床を軽く弾く。
それと同時に真人を囲む匣が出来上がる。

その外側にいた夕鈴は「凄いねー」といいながらこつこつとそれを叩いた。ガラスに触れるような感触がする。

「あんま叩くな。お前が触ると壊れる」

「酷っ！ 私、不可視なものまで壊せないよ」

いつてるそばから夕鈴が手のひらで目視することは出来ない壁を、ぐい、と、押すと、ふ……っと、消えてしまった。

ほら見る。と、いうように肩を竦めた真人に夕鈴は不思議そうな顔をしたがその説明をする前に道場内が騒がしくなった。

兄妹

「ただいま、鈴ちゃん。頑張ってるみたいだね」

にこにこ入ってきたのはもちろん雅だ。

いつもならそのまま抱擁を交わすところだが、雅は夕鈴の傍で足を止めて調子はどう？ と、微笑んだ。

その様子に、一瞬虚をつかれたようにきよんとした夕鈴に気がついた雅は、ああ、と眉を寄せると説明を加える。

「ごめんね、今日は仕事で汚れてしまってるから……お風呂の前に夕鈴の顔が見たいなと思ってこっちに寄ったんだよ」

「その割には、早かったな？」

真人の問い掛けに雅は「まあね」と微笑むと軽く肩を竦める。深くは問うなということだろうと理解した真人は「あ、そ」とそれ以上、言及はしなかった。

雪杜家の生業は不可視なものも、もちろん扱うがそれらが実体化してしまったものも扱う。肉体を得たものは、普通の人や動物と変わらず血も肉もある。

だからそれを絶つとすればとても綺麗な仕事とはいえないことも多い。

「おい、真人。腹が減った飯はまだか？」

丁度見ていた番組が終わった頃合いだろう。

ずかずかと道場に入ってきた紫月は不満を隠すことなく表情に出して毒づいた。

「お前はどこのご隠居だよ！　つか、ついこの間まで『空腹は感じない』とかいってただろうがっ！」

「それはこの間の話だ。真人は若いのに柔軟性に乏しいの。夕鈴が食えというから食えばそのあとは必然的に腹が減るだろう？」

早くしろ。と、続けた紫月に真人は表情を強張らせる。

「ま、まあ、真人ちゃん。うん。子どものいうことだから、ね、ほら、ご飯の準備しようか、うん」

どうどう、とばかりに真人の腕を叩きながらそういった夕鈴に、真人は「子どもじゃねえだろ」と盛大な溜息を落とし、項垂れて続ける。

「大体さー、和江さんに晩飯も作ってもらえば良いだろ？　なんで晩飯は俺が作らないといけないんだよ」

面倒だ。と、ぶーたれた真人に夕鈴と雅は顔を見合わせてにこりと微笑むと声を揃えた。

「それは真人（ちゃん）のご飯が美味しいからだよ」

「……そういうことだ、早くしろ」

三人にそう告げられ、しよーがねえなとぶつぶついながら道場を後にする真人の姿は満更でもなさそうだった。

そして、腹が減ったとせつつく紫月に負けて、夕鈴たちは雅を待つことなく先に食事を取った。

今日は今年入って初の栗ご飯。

少しもち米が入っていたのでもっちりとした食感と、栗のほっこりとした感じが美味だった。

夕鈴が真人と共に夕食の片付けをしている間、紫月は居間に居るものだと思って夕鈴は顔を覗かせたがそこに紫月の姿を見つけることは出来なかった。

どこにいったのだろうか？ と、首を傾げつつ、自室に戻るとそこから続きの周り縁に紫月の姿を発見した。

「紫月は、かぐや姫みたいね？ 月、好きなんだ」

ぼんやりと縁側の柱に背を預け月を仰いでいた紫月にそっと歩み寄って声を掛けた夕鈴は紫月は見ることなく、ふう、と息を吐く。

「ワシも年を取った。まだ若かった頃は無知とは愚か者をさすのだと思っておった……しかし、夕鈴ほどのものを知らぬと逆に安堵しているところがあるのも事実だ。知らぬというのは悪いことばかりでもない……」

「……それはやっぱり馬鹿にされてる？」

ちょこんと紫月の傍に腰掛けた夕鈴の不満そうな声に紫月は、くつと息を殺して笑った。

今の紫月の年恰好からして重ねた年月を窺い知ることは出来ない。どう見ても今は小学生くらいだし、青年を模したときのことを思

い出しても夕鈴の目から見れば雅と同じくらいかも少し上か……
程度のもので、年嵩を重ねている風にはとても見えなくて実感として湧かない。

「褒めている。気が楽だと……そう、いつているのだから」

そういつて、ちらりと夕鈴を見た紫月の紅い瞳に戸惑う自分のほうがどうかしていると思いつつ反射的に「ありがとう」と夕鈴が返すと紫月は益々笑った。

次の言葉を搜すために夕鈴が口を開こうとすると「鈴ちゃん」と声が掛かる。

顔を上げれば雅が肩から提げたタオルで髪を拭きながら歩み寄ってきた。その姿に夕鈴は「雅ちゃん」と喜色を浮かべ腰をあげ「ご飯済んだ？」と笑顔で問い掛ける。

「ううん。今夜は良いんだ」

夕鈴の笑顔に答えるようにやんわりと瞳を細めてそういつた雅に、はたと何かに気がついた夕鈴は「あ」と声を漏らしごめんねと謝る。

真人は、家の仕事をしたあとは大量に食事を取る。

雅はその逆で大抵仕事のあとは食事を取らない。

特に今夜はそういう気になれない類の仕事だった、というのは先に分かっていたのにそれに気がつかなかった自分を恥じるように夕鈴は謝罪を重ねたが雅は気にしないでと首を振った。

「それより、時間が許すなら勉強にする？」

にこりと毒なくそういった雅に夕鈴はうんと頷いてから、紫月に夜は冷えるから早く窓を閉めて部屋へ入るように念を押し雅と部屋へ戻った。

夕鈴は鞆の中から今日持ち出してしまっていた本を取り出し部屋の中央に置いたローテーブルに載せる。

それをちらと見て雅は「読んだ？」と問い掛ける。

夕鈴は、曖昧に微笑んで少しだけと親指と人差し指で示す。

「良いよ。気にしなくて、ちょっと難しいよね、この本」

「私には少し……でも、百鬼夜行の成り立ちから書いてあったけどさ、紫月のことは詳しく書いてない気がしたんだよね？」

私が読み落としただけかな？ と、首を傾げた夕鈴に雅は書いてないよと微笑んで卓上の本をぺらぺらと捲る。

「紫月。封印の鬼は元来鬼ではなく人であつたといわれてる。それはもう、とてもとても古い僕らのご先祖様なんて説もある。ええとね、鬼とか、物の怪、妖怪とか、人と異なると境界線を引かれてしまふものにも種類があつてね、稀に人から転じるものも居るんだよだから紫月はそちら側、と、いわれてるんだけど、詳細は不明。文献に残っているものが少ないんだ」

いつて雅は、ちらりと、周り廊下のほうへと視線を送ったあと「本人が焼失させたって話だけど、これも事實は不明」ちよこつと肩を竦めて「黙すれば事實は白日に晒されないからね？」と締め括った。

夕鈴は、同じように廊下のほうを見てふーんつと相槌を打つ。

そして、ふと思ひ出したように、そういえばと夕鈴が本を指先で

ぴんつと弾く。

「真人ちゃんに怒られたよ。持ち出して良いもんじゃないって」

「ん？ ああ、僕は夕鈴なら持ち出すと思ってたよ？ 別に良いよ。忘れて帰ったりしなきゃ」

ほんの少し拗ねたように口にした夕鈴に雅はくすくすと笑い、真人といえばと思い出したように話を始めた。

「なかなか時間が取れなくて、説明してなかったよね。事が起こった以上……」

と口火を切った雅に夕鈴は「起こした」だけどね。と苦笑したが雅はゆっくりと首を振り「起こった……だよ」と重ねた。

「父さんがいつてたよね？ ある程度の予測はしていた。何かあるだろうと思っていたって」

「あ……、うん」

「それはね、夕鈴に解放する力があるからだっただよ」

慎重に口を開く雅に夕鈴は正座して座り直すと「解放する力？」と問い返していた。

「僕や、真人。もちろん父さんも、だけど、みんな滅する力を強く持っていて、この家はその力を元に成り立っている。それはもう気が遠くなるほど昔から……ね？ でもね。稀に解放する力をとても強く持つて生まれる子が居るんだ」

ゆるくテーブルの上で組んでいた指先を見つめながら、ぽつぽつと、話す雅はそこで一度切ると、静かに深く息を吸い、ゆっくり吐

き出すと「蔵書を紐解けば隠すのは無理だから話をするけれど」と前置いて話を続けた。

「解放する力を持つ子は忌む子とされて昔ならこの家からは追放されていた。災厄を産む子だからと」

「え？」

「昔だよ。今じゃない。夕鈴の持っている力の話だけど夕鈴の話じゃない」

きつぱりと雅はいい切ったが、それが、とても矛盾していることくらいは夕鈴にも分かった。

それでも「違っんだよ」と眉を寄せて口にした雅に夕鈴は「大丈夫だよ」と笑って続きを促した。

「夕鈴は知らなかったから、気がつかなかったのだろうと思うけど、封印の……あの蔵はね、その蔵自体にとっても強い封印が成されているんだよ。僕や真人でも入るのは困難なほどに……そのくらいに父さんが縛っていたんだ……」

「え、でも、私鍵なんて……封印なんて何も……」

暇つぶし程度に古いものを見て遊ぶ。

程度の気持ちでいつも勝手に入り込んでいた。

門かんぬきがしては有ったが特に施錠されているという風でもなかったし、

門も夕鈴が動かせないほど重たいものでもなかった。

「父さんもアレで居て、面倒臭がりだからね。最初のうちは軽いものから入っていたようだけど、夕鈴が最後にあの蔵に入るより前に、僕にいったんだ『防ぐことは無理そうだ』と」

そして、事件は起きてしまった。と、続けてようやく雅は顔を上げると夕鈴を見て哀しげに微笑み「ごめんね」と謝罪する。

悪いのは勝手に入った自分であることも、勝手に開けてはいけない壺を開けてしまった自分だということも分かるからどうして雅が謝らなくてはいけないのか分からなくて夕鈴は困惑した様子で首を振った。

「僕らが悪いんだ、夕鈴には何の力も開眼されることなく普通に生活して欲しいと願ったから。伝えることを怠り……力に気がつくことも、目覚めることもなく普通に……そう過ごせるように尽力するつもりだったのに、そうしているつもりだったのに結局はその全て無駄だった」

「そ、そんなことないよっ！」

がたりつと大きな音を立ててそういきつた夕鈴は「そんなことない」と繰り返したものの頭が混乱して次の言葉が出てこない。

「大きな声出して喧嘩か？ 差し入れ持ってきたけ、ど……」

ノックもあつたのかなかったのか確認できないくらいの勢いで、真人が、お行儀悪く足で襖戸を開いたが二人の空気に「それどころじゃなさそう、だな？」と苦い笑いを零す。

お茶のお供

で、どうした？ と、続けた真人に夕鈴は俯き、雅はふう……とゆっくり息を吐くと、静かに立ち上がり真人の手からお茶と茶菓子の載ったお盆を受け取った。

「解放の力の話を少ししていたんだ」

「あー、あの破壊力抜群のやつな」

毒なく口にした真人に雅は困ったような顔をしたが、真人は全く気に留めることもなくお盆に載せてきたクッキーを一つ摘み上げてぱくりと口に放り込む。

そして、夕鈴の正面にどっかりと座ると「雅、お茶」と机を叩く。雅はそれに促されて、お盆を机に載せて用意された湯のみ四つにお茶を注いだ。

クッキーに、煎茶……ここは紅茶を持ってくるところだろう。と、いつもなら夕鈴がぶつぶついうところだが今日はぼんやりと雅の手元を眺めていた。

「何？　なんでその程度でどんよりしてんの？」

「だって、真人ちゃん。私、居ないほうが世の中の為だったのかも……」

「は？　なんで？　なんでそんな話になるんだよ」

真人は湯飲みを一つ取り上げて一口流し込んでから、外へ向けて身体を投げ出すと「紫月ーお茶ー」と声を掛けて体勢を戻した。物凄く普通でいつも通りだ。

その姿に雅は苦笑すると、一つ夕鈴の前にお茶を置いて自分も手にとって傾けた。

「大体、迷惑掛けるのが妹の仕事だって豪語してる奴が、今更なんだよ。迷惑に大小ないだろ？ お前一人に尻拭いできなきゃ、俺らが何とかしてやるし、加えてやつちまったことをうだうだいのは雅だけで十分」

「僕はうだうだなんていわないよ？」

「ワシは、羊羹のほうが良い。これはぼそぼそするから好まん……」
「いうなら食うなよ」

ちら、と、見た雅にいつもの雰囲気に戻っているのを確認してから真人は、でも、と口を開いた夕鈴の口にクッキーを放り込んだ。うつ！ と息を詰めた夕鈴に真人は笑い、雅は駄目だよそんなことしちやと、夕鈴の口からクッキーを抜き取った。

「けほ、あ、ありがと、って、雅ちゃん、食べちゃ駄目だよっ」

「え？ ごめん。ついいつものクセで」

真人は躊躇することなく夕鈴から取り上げたクッキーを食べてしまった雅に苦笑したし、夕鈴は慌てていたが正直これが普通だ。

雅はお茶を飲むと一息吐き。

ちらつと真人を見たあとくすりと笑いを零した。こういうときは大抵真人にとって良い話は出てこない。

真人が警戒したところでやっぱり雅は話し始めた。

「可愛くないこというけどね？ 真人も物凄く心配してたんだよ」

あまり面白い話になりそうにないことに慌てた真人は止めようとしたが、お兄ちゃんを止めることは出来ない。

笑顔で制して夕鈴覚えてないかな？ と、話を続ける。

「真人がまだ小さいときに書庫に入って、もんのすごーくっ！ 父さんに怒られて三日間使われてない蔵に閉じ込められてたときのこと」

いわれて益々バツが悪くなった真人は、足首が交差した部分を掴んで落ち着かな気に膝を揺らした。

夕鈴はそれを視界の隅に留めて、覚えていると頷いた。

あんなに怒っている父親を夕鈴は見たことがなかったから、忘れるというほうが無理な話だった。

「書庫の奥。正式に雪杜の名を継ぐものしか入るのを許されない場所まで潜り込んでたんだ。その上、そこで何をしていたかをいわないものだから、父さんの逆鱗に触れちゃって……三日たっても何もいわないから、痺れを切らせた父さんに頼まれて事情を聞きにいったらさ」

「いや、もう、だからあれは子どもものときで」

止めたところで止まるとは思わないが、一応口を挟んだもののはりスルーされた。

それに雅は特に意地悪をしているという風ではなく、どこか嬉しそうに続きを口にする。

「夕鈴を他へやらないでって泣いて頭を下げられたよ」

「へ？」

思わず夕鈴は間の抜けた声を上げた。

「真人はとても力が強かったから、夕鈴の力に気がついてしまったんだよ。そしてそれが意味することも……だから、なんとかそれを隠す方法がないかって探してたみたいでね。結局見付からないし怒られるしで、最終的にお願いするしかないと思ったんだろうね」

頭は俯ききってしまったている真人のちらりと覗く耳まで赤い。

泣いてないし、とか、あれは子どもだったからで……とか、ぶつぶつ聞こえる。

絵面的には、天辺から湯気でも出そうだ。それとは対照的に雅は凄く楽しそうに笑った。

「もちろん、僕も父さんもそんなつもりは全くなかったし、第一、覚醒していない力を見つけることが出来るのは極一部だ。本人だつて気がつかないんだからね。あの時は本当に驚いたよ。真人が見つけたこともだけど、何より僕が初めて真人からお願いされたことだったから」

絶対にきいてあげたかったのにね……。と、最後は寂しそうな笑みになった雅に夕鈴はしょぼんと「ごめんなさい」と呟いた。

だから、夕鈴は悪くないとかごちゃごちゃ揉め始めた二人の間を割るように、ずいっと腕を伸ばしたのは今まで物凄く大人しくクッキーを頬張っていた紫月だ。

「お茶」

「え？ ああ、うん」

目の前で空の湯飲みを振られて反射的に雅は受け取って急須に新しく湯を注ぎ、茶の準備を始めた。

紫月はその様子を見ながら、顎を机の上に載せ背中を丸めると「くだらんのお」とぼやく。

その一言に何故だかむっとして、夕鈴が何かいい掛けたが声になる前に紫月が続けた。

「ことは必然。偶然ではない。大体夕鈴の力は秘めていただけじゃ。ワシの血がなければ覚醒せなんだし、未だに使いこなせているとはいえぬ未熟者で無能力者だ」

「つまり紫月のせいだ？」

紫月の悪態にそう冷やかした夕鈴を見ることなく、紫月は「そうじゃの」と驚くほどあっさり認めた。そして、差し出されたお茶を持って立ち上がると、ふらりとまた縁側に出て行ってしまう。

「え、ちょ、待ってよ。冗談……だったのに……」

慌てて掛けた夕鈴の声に足を止めることをしなかった紫月の後姿を見送ってしまった。

どうしよう。と、おろおろと二人の兄を順番に見た夕鈴に二人とも揃って苦笑し、気にしなくて良いだろうと肩を竦めた。

そのあとは昔から聞くことを拒み続けてきた昔話を最後まで聞かされ、夕鈴のテンションは下がってきた。

雅はその姿に至極申し訳ないという感じだったが、真人は昔過ぎで本当かどうかなんて分からない話だぞ？ と、笑い飛ばした。

そんな二人の気遣いにもなんとなく元気にはなれなくて、今夜は遅くなったからと真人は出した食器を片付けるため襖戸から、雅はそのまま部屋に帰るつもりだからか周り縁に繋がる障子戸を、

「おやすみ、ゆっくり休むんだよ」

と、念押ししてあとにした。

夕鈴はその後姿すら見送ることなくぱたんと戸が閉まる音だけを聞き送った。

ぼんやりと縁側に座っていた紫月は、ぎしり、と、板が軋む音に顔を上げた。

その先にはもちろん、夕鈴の部屋から出てきた雅が居て紫月の了承を得ることもなく「冷えてくるから閉めてあげて」と雨戸を閉め始める。

紫月は迷惑そうな顔をしつつも外に投げ出していた足をしまい、目の前を通り過ぎていく硝子戸を見送った。

「紫月には見えないんだよね？ 欠片……」

雅は雨戸に手を掛けて紫月が見上げていた月を仰ぎ、ぽつと呟く。含むところが分からずに紫月はああと頷いた。

「どうして、夕鈴なの？ 何故、夕鈴を選んだの？ 封印を開けたから、それだけじゃないよね？ だって開けるだけなら僕や真人、ましてや父さんなら出来たはずだ」

がたんつと硝子が鳴る。

真つ直ぐ見下ろして切実問い掛けてくる雅に、紫月はようやく腰を上げ、それでも見上げなくてはいけない雅の瞳を覗き込んだあと、ふっと顔を伏せ傍の柱に背中を預け小さく嘆息した。

「……成せども成さぬのと、成したものの差は大きい。前にもワシがいったようにこの家でワシの血を受けられるのは夕鈴だけだ。玄海やお主たちでは反発する力が強すぎる。ワシは無駄はせん。どれだけのものが死のうと生きようとワシには関係ない、興味もない。だから試したければ試せば良い。じゃが、ワシは自ら傷を付けるのは好まん」

ワシに傷を付けられるのか？ と、続けてにやりと口角を引き上げた紫月に雅は苦い顔をして「今更そんな無駄はしないよ」と零した。

それでも、尚、どうしてかと食い下がろうとした雅に紫月は続ける。

「欠片を受けるのは生き物……欠片を集めるのに滅する力は不要。その力を持つておるものはその力に頼ろうとする。一番簡単な方法だが一番不確かな方法でもある。欠片はもろいそれが細分化したら終わりじゃ。見つけることは叶わん。それこそ星の数ほど切って捨てねばなくなる。無能であるほうが良い」

「……それは、面倒を嫌う君のため？」

ぎりつと、奥歯を噛み締めるようにして搾り出した雅の声に、紫月は酷薄な笑みを浮かべ硝子越しの月を仰ぐと「ああ」と同意した。紫月にとってそんなことはどうでも良いのだろう。

雅も完全にそうではないことくらいは分かるが、ぎゅっと拳を握り締めると怒りを静めるように大きく一つ深呼吸して、

「たとえ世のため人のためであつたとしても……夕鈴を道具にすることは許さない。ちゃんと、返してもらってから」

きつく念を押すようにそう告げて止めた足を踏み出し、紫月の前を通り過ぎたがふと足を止めて「それから」と付け足した。

「紫月の部屋。ちゃんと使ってね」

「気が向いたらな」

「使ってね！」

軽口で返答したら射殺しそうな目で念を押されたので、紫月は気圧され思わず、うむ、と頷いてしまった。

それを確認してから雅は廊下を立ち去っていった。

鬼の寝床

部屋は夕鈴の隣を一応宛がわれていた。

部屋など必要ない、という申し出は直ぐに却下された。

なければ夕鈴が気を遣って同じ部屋に居ることを許すだろうことは火を見るより明らかだ。

そんなこと兄二人は許さない。

そのときのことを思い出した紫月は面倒くさそうに肩を落とし、自室へと続く障子を開けて部屋に入れば一通りのものは揃っている。しかし、紫月は部屋の中では特に何も必要とはしなかった。

紫月は部屋の隅に立てかけてあった刀を手にとると、そのままそこへどっかりと腰掛けて片方の膝を立て腕を預けると頭を擡げた。睡眠も鬼にとってはどちらでも良かったが、夕鈴にとっては必要なものだ。

それを得るには人にとって夜が最適なのも十分分かっている。

見る夢も持ち合わせず紫月はただ瞼を落とした。

夕鈴はごろりと布団に転がってぼんやりと天井を見上げた。

見慣れた天井板を今は怖いとは思わないが、幼い頃は人の顔に見えるだとか、おばけに見えるだとか兎に角怖がったのを覚えている。

そのたび三人で同じ部屋で眠った。

枕を寄せ合って嫌だというのに怖い話を始めてしまう真人に、それを止めてくれれば良いのに止めることなく、楽しそうに笑ってそつと耳を塞いでくれた雅。

あの頃は正直何も怖いものなんて、本当はなかった。

母の死はあまりに幼すぎてあまり覚えておらず、夕鈴にとってこの家で過ごした日々はとても満ち足りていて幸せなものだった。

百鬼夜行の物語は夕鈴の予想通りとても哀しいものだった。

夕鈴にはそこに在る根底的なものが、友情なのか愛情なのか分からない。

分からないけれど、大切なものを奪われる哀しみだけが凝縮されているような気がした。人の心に潜む負の想念が形になり鬼となる。

堕ちていく大切なものを、ただ引き止めたくて、ただ護りたくて、ただ……。

「――……駄目だ。眠れない」

夕鈴は足で反動をつけて起き上がると、布団から這い出て隣の部屋の襖を叩く。

こすこす、と、軽い音をさせて「紫月？」と声を掛ければ、だるそうに「なんだ？」と返ってきて夕鈴はそつと戸を引いた。

「眠れない」

「……ワシにどうしろと？」

開けた戸の隅に座っていた紫月に夕鈴は少しだけ驚いて肩を跳ね

させたあと、思わず口にした言葉に紫月は素直に怪訝な顔をした。

「いや、それは良いんだけど……。どうして、紫月そんなところに座ってるの？ 布団使いなよ。寒いよ？ 風邪引くよ？ 鬼の霍乱の実験？」

矢継ぎ早に口にした夕鈴に紫月は眉を寄せる。

そして用件を早くしろというように、顎をしゃくった紫月に夕鈴は「あー」と零して、用はない。と告げた。

「それならば休め。ヒトには休息が必要じゃ」

「分かってるんだけど、ね。えっと、その……。紫月が、紫月なんだよね？」

敷居を切るように寝転がってそっぴいながら足で、ぱたん・ぱたん、と、畳を打った夕鈴に紫月は眉をひそめてその姿を見下ろすと首を傾げる。

だからね、と、続きを考えるように両手で頭を抱えた夕鈴は、暫らく畳と仲良くなったあと不意に顔を挙げ

「だから、封印の鬼って紫月だけなんだよね？」

と勢いよく告げる。

紫月は僅かに驚いたように肩を強張らせたが、直ぐに平常に戻り「当たり前だ」と頷いた。

夕鈴はそれに、そっか、そうだね。と、勝手に納得しているのかしていないのか分からないようなことをぶつぶつと呟いた。

「じゃあ、じゃあさ……紫月はどうして百鬼夜行を封印することに

したの？」

封ずるだけの力があるのなら消滅させることも出来たはずだ。語り継がれる物語には事実しか知らしめられてはいない。

夕鈴の素直な問いに紫月は暫く黙したあと、忘れた。と、だけ告げた。

「まさか！ そんな大切なこと忘れるわけないでしょう？」

「忘れた。ワシは主の問いには真摯に答えておる。もう、気が遠くなるほど昔の話じゃ。時々夕鈴のような輩がワシを封印から解いたがそれ以外は、ずっとあの中に留まっておった。夕鈴も見たじやろう？ あの間を。何者も映すこともなく捕らえることもない漆黒の間」

紫月の言葉に夕鈴はもぞりと起き上がって膝を抱えた。

紫月を解放したとたん間が広がった。

全てが黒に覆われて何も見えず感じることも出来ず……心だけが置き去りにされるような感覚に陥る場所。あんな恐ろしい思いはしたことがなかった。

「そんな中で引き籠もっておれば、ことの起こりがどうであつたかなど瑣末なことよ。どうということはない、ワシがやるべきことを忘れなければそれだけで良いのじゃからな……」

「紫月」

淡々と語り終えたという風な紫月に夕鈴はぬつと腕を伸ばすと、よしよしと紫月の頭を撫でた。

なっ！ と、声を詰めた紫月にやんわりと微笑んだ夕鈴は、少し

だけ。と、重ねて止めようとはしない。

「さっきはごめんね。紫月のせいだなんて思ってたないから……私、自分でやっちゃったことだけど、紫月のためにも頑張るよ。だから手を貸してね？」

そういった夕鈴の手を掴まえて頭の上から降ろすと紫月は「問うなといったじやろう」と口角を引き上げる。

そして、くくつと笑いを堪えたと続けた。

「ワシが選んだというのを忘れるな。他のものが封印を解いておつてもその後始末は夕鈴にまわって来たということじゃ」
「良いよ、それでも」

迷うことなくそういつて頷いた夕鈴に紫月は、呆れたように溜息を吐き「早く寝ろ」と、いつて、しっしと手を振った。

夕鈴はその様子に分かったよと頷いて立ち上がるとふと紫月を見て小首を傾げる。

「素朴疑問だけど、私じゃない誰かが開けてたらどうしたの？」

「それはもちろん、そのような呆けもの生きるに値せぬ。ワシに面倒をかけるのじゃ、命ぐらいでは安いものよ」

にやり、と、意地の悪い笑みを浮かべてそう告げた紫月に、夕鈴は自分がやったので良かったのかも知れないと複雑な心境を噛み殺した。

そして、気分を変えるように一呼吸置いてから、

「紫月。布団で寝るように！」

と締め括って軽くぱんつと襖戸を閉めた。

閉まりきる直前にちらりと見えた紫月の虚をつかれたような吃驚顔に夕鈴はくすくすと笑うと自分も一つ大きな欠伸を零して布団の中へと戻った。

—— ピピピ……ピピピ……ピピピ……

肌寒さを感じるようになった季節。

しん……っ、と、静まり返った部屋の中で規則正しい機械音が鳴り響く。

「五月蠅い」

「ん……ちょ、待って、今、止める」

布団の中から腕を突き出し振ってみたが届かない。

諦めてもぞりと上半身を布団から出して、ぱしりっ、と、小鳥型の目覚まし時計を止めた。

ぐっ、と小鳥の頭を押さえたまま暫し黙した夕鈴はぼんやりしていた頭で考えた。

—— ……今、自分は誰かと会話をしていなかったか？

と……。

「紫月っ！」

がばりっ！ と、一瞬にして覚醒した夕鈴は布団を捲くる。

「何をする、殺されたいのか？ 布団を返せ」

小さく丸くなっていた紫月は顔を上げることなく、腕を上げ体の上から去ってしまった掛け布団を探す。

「駄目だよ、紫月。また雅ちゃんに見付かったら騒ぎになるからっ。そ、それに一緒に寝るなんてホント駄目だよっ、うん。ほら紫月、起きて！」

ゆさゆさと、夕鈴が紫月の肩を揺すると面倒臭そうにその手を払って、少しだけ起き上がる。

命令には一応忠実だ。

いろんな意味で忠実だ。

「布団を返せ。朝は冷える。夕鈴もワシが添い寝したほうが暖かいじゃろ？ ああ、そうか……夕鈴は、こちらの姿の方が好みか……」
「わわっ！ もっと問題ありだから戻ってっ！」

未だに脳内覚醒が追いついていないのではないか？ という紫月は、ふっと青年の姿に戻り慌てた夕鈴の腕の中から布団を奪い取って再び倒れこむ……と同時に

「鈴ちゃん、おはよう。朝から賑やかそうだけど、どう、した」

の？ と、いい終わるまでに、ぱんっと何かが弾ける音がすると辺りには羽毛布団の羽が散乱した。

「みみみ、雅ちゃん。落ち着いてっ」

慌てて立ち上がった夕鈴を目で制して雅は、ゆらり……と、紫月に歩み寄る。

「しーづーきー。どうして君はここに居るのかなあ？」

「折角もう一度暖をとろうとしておったのに、邪魔をするな雅。何度もいわせるな。ワシは暖を取っておっただけじゃ」

「とても寒がりな君には電気毛布も湯たんぽも用意したよね？ それでも寒いんだ？」

怒りを押し留めるように静かに口にした雅の問いに、夕鈴は少しずつ二人から距離をとった。

「夕鈴と寝るほうが良い。それとも何か？ ワシと殺^やりあおうというのか？」

しれ……っと、口にした紫月に我慢の限界だとばかりに雅は、すっと手を掲げると「切りかかれ」と唱える。

その声に応えるように、風が刃となり紫月に襲い掛かる。

それを紫月は足先で軽く弾いた刀の鞘で簡単に弾くと、かちりつと僅かに刀を抜く。

——キン……ッ

風と同時に踏み込んだ雅の刃を受け止めた紫月は、長く競り合うことなく弾いて立ち上がると刀を鞘から抜き出し、軽く雅に構える。雅は力を具現化することが出来、その形状は多種に渡るが夕鈴がよく目にするのは今もよろめいた体勢を立て直して構えた刀だ。

淡く光を放つ刀身は朝日を弾く紫月が構えた日本刀とは全く質感が異なる。

「や、やめてったら!!」

「悪い子にはお仕置きが必要だよね」

「どちらが仕置きされるかまだ分からんようだな、雅」

こうなると夕鈴の声は届かない。

今朝も障子を弾き飛ばして外に出てしまった二人を呆然と見送って夕鈴は深く溜息を吐いた。

「朝からうるせーな。またやってんのか？ あの二人。元気だなー

……」

「止めてよっ！ 真人ちゃん」

あまりの騒動に様子を見に来た真人の腕を引いて懇願したが、真人は冗談だと肩を竦めてあっさりと口にする。

「嫌だ。あんなところ入ったら怪我するだろー。俺、平和主義だから。あいつらも加減くらい知ってるだろうから、夕鈴は顔でも洗って飯にしるよ」

ほらほら、と、揉めている二人からくると回され、居間のほうへと背中を押された。夕鈴は背後の爆音を気にしながら足を進める。

これが雪杜家のいつもの風景になりつつあった。

朝餉

「でもさ、なんで紫月はいつも子どもの姿なんだろう？」

二人を待つことなく、先に朝食の席に着いた夕鈴は一緒に食べ始めた真人にぼつりと訪ねた。

真人は、和江によそってもらった味噌汁を受け取りつつ「面倒だからだろう？」と答える。

ひよこひよこ見た目を変えるほうが余程面倒なのではないだろうか？ と、夕鈴は思いつつぱくりとご飯を口に運んで分らない……という風に首を傾げた。

因みに今朝は和食の日だ。

「あいつ馬鹿みたいに力が強いからな。押さえとくのが面倒だから器小さくしてるんじゃない？ 俺に聞くなよ。それにどっちでも良いだろ」

ずずつ、と、お行儀悪く味噌汁をすすったあと、ふと顔を上げた真人はにやりと口端を引き上げた。

「そっついやあ、夕鈴はデカイ紫月が苦手そうだな？ 直ぐ真っ赤になってるし」

「！ そ、そんなことないよっ！ そ、そんなことないけど……なんだか、紫月の紅い目見てると胸の奥がざわざわするんだよ」

さわさわと胸を擦って、むーっと眉を寄せた夕鈴に真人は、訳知り顔であーと頷く。

「あいつ一応鬼だからな。まあ、一応お前が堕ちるなんてことないと思うけど、気をつけとけよ」

真人の言葉に夕鈴は堕ちる……堕ちる？ と繰り返したあと、ああと納得すると

「催眠術的な何か？」

「違うけど、もうそれで良いよ」

うわっ！ 投げやりすぎるっ！ と、夕鈴が突っ込む前に背にした障子が開いて、ぶつくさいっている紫月と雅が入ってきた。

二人とも一件落着というわけでもなさそうなものの満身創痍というわけでもなく、いつもの席に着く。

夕鈴の隣に座った紫月は大抵そこが定位置なのに、今日に限って夕鈴が僅かに避けたのが気に入らなかったのか紫月は「なんだ？」と眉をひそめる。

なんでもないよっ！ と、答えたのにも拘らず

「デカイ紫月が苦手なんだとよ」

真人が笑いを噛み殺しながら続ける。その言葉に怪訝そうな顔のまま夕鈴を見た紫月に慌てて夕鈴は否定した。

「ち、違う！ 別に苦手とかじゃなくて、お、大きくて邪魔でしょ……ち、小さいほうが、ね？ ほら、うん。可愛いしね？」

可愛いと自分で発しておきながら、可愛い？ と、疑問に思い首

を傾げる。

子どもサイズの紫月はふてぶてしいという表現がぴったりだ。

そして、そのときと同じように紫月は顎を上げ、ほう？ と瞳を細めて夕鈴を見下ろす。

「やはり夕鈴はワシに惚れたのか？ まあ、仕方ない。ワシはイケメンじゃからな」

突っ込みどころは多々あったが、夕鈴は脱力感を覚えながらそのちぐはぐな台詞に眉を寄せる。

「イケメンって……紫月そんな言葉どこで覚えたの？」

そして全員が今は点いていないテレビ画面をちらと見た。

はあ……と、嘆息した雅に、小さくなっておけば？ と、促されそれに夕鈴が頷くから紫月はお行儀悪く箸を銜えたまま普段の姿に戻った。

静かに食事を終えた夕鈴はご馳走様と手を合わせたあと、お茶を飲みながら朝のニュースを梯子していた真人に「ねえ」と声を掛けた。

真人は「んー？」と後片付けを始めた和江を避けながら促きを促す。

「今日はお休みだけど、真人ちゃんは暇？」

「俺？ 俺は、まあ、暇っちゃあ、暇だけど。全く進まないお前の練習に付き合わないといけないだろ？」

至極、面倒臭そうにそう零した真人に、お茶を飲んでいた雅が顔をあげると「僕がやつても良いよ」と微笑む。

「今日は僕も暇だから、僕が変わっても良いよ。真人」

「休みて、雅久しぶりじゃねえの？　なら、フツーに休んどけよ」

「そうだけど、僕は鈴ちゃんの相手してるのが一番癒されるから良いんだよ」

にこにことそう続ける雅に真人は呆れながらも、それなら……と頷きかけたところで、すっと障子戸が開き入室者の声が聞こえた。

「おはよう、皆集まっているようだね？」

その声の主を確認した面々はそれぞれに「おかえりー」とか「父さん」など口にした。

「お帰りなさいませ、旦那様」

と座布団を改めて用意した和江に下がるよう伝えてからよいしょと座って順番に皆の顔を見たあと「さて」と早急に話を始める。

「というわけで、明日。夕鈴は家を出る」

全員の目がちよつと待て。とか、何がというわけなんだ。と、訴えていたが、この子にしてこの親あり。

独自のペースを崩さない。

玄海は確認するように「そう明日だ」と頷いた。そして、続ける。

「ふむ。そんなに心配しなくても大丈夫だ。夕鈴が新しく編入する

クラスに不審な生徒はいなかった。時間がなくてクラス分しか出来なかったことが心残りではあるが……」

「親父、調査は個人情報保護の面からいつて駄目だろ」

「娘を心配して何が悪い」

もう何から突っ込んで良いのか混乱した真人の言葉に玄海は胸を張る。

頭首としては有能なのだろうが父としては子どもに甘すぎる馬鹿な親タイプだ。

「父さん、話は順を追ってしてよね。それで、何がどういうわけで明日なの？」

静かに……しかし、ぴしゃりといい切った雅に、玄海は「あ、あ」と頷いた。

静かに怒りを含んでいる雅は家族全員苦手だ。夕鈴でさえ、じりつと紫月のほうへ寄り添った。

「怒るな、雅。ええとだな。つまり欠片が潜んでいそうな場所と事件見付かってだな……今はまだそれしか手がかりがないからそこから」

「神無台かんなんだいの吸血事件か？」

ぽつつと口を開いた紫月に玄海は頷いた。

「吸血事件？ そんなのテレビでやってなかったけど」

素直に首を傾げた夕鈴に紫月は説明する。

「数日前、地方紙の端に出ていた小さな記事だ。全国紙には一切触

れられていなかったところからしてそれほど甚大な被害が出ているものじゃないだろう……もしくは情報は伏せられているか……じゃない」

「……紫月って本当にあの新聞の山読んだのね」

紫月の話よりもそちらに驚いている風な夕鈴に紫月は眉を寄せた。

「確か、女子高生が襲われた事件だったよね。被害者は一命を引き止めはしたけれど、ほぼ致死量に値する血液が抜けていた。外傷は一箇所を除いては全くな……小さな傷跡が二つ……首筋に認められただけだ。その形状から吸血鬼の仕業、なんて話になったけれど警察は愉快犯と見てるし医療関係者を当たってるって話を……」

ぶつぶつと、自分の頭の中を整理するように口にした雅に玄海は軽く頷いた。

「で、でもどうしてその欠片と事件が関係するの？」

全く意図することに検討がつかない夕鈴は紫月からの痛い視線に耐えかねて雅が重ねて答える。

「封印の欠片には負が詰まってるんだよ。だからそれを得たものはそれに狂わされる。愉快犯とかに繋がってしまう場合が多いから……怪事件、イコールっていうのは僕にも分かるけど、心配だな……そんなの夕鈴一人にやらせるのは……」

自分の都合がつかないものかと思案し始めた雅に玄海は「仕方ないんだよ」と苦笑する。

「私も夕鈴に付き添ってあげたいのだけれどね……こればかりはど

うしようもない。私では見る目と解放する力が足りないのだよ。ああ、でも支援は全力で行うよ。住むところも知人に頼んでおいたから安心して良い。あとは夕鈴を信じてあげることしか出来ないんだ」

悪いね、夕鈴。と、締め括った玄海に夕鈴は首を振った。

もともと自分が撒いた種だし、自分が行わなくてはいけないこととはいえ紫月も居る。

本当の意味で一人というわけではなかったことが夕鈴を安堵させていた。

「でも、なんで明日なの。明日って、今日休みだし、一応メールするけど、でも皆にさよならもいえないし、説明も出来ないよ」

「一日でも早い解決が求められておるのに、その程度の感傷捨ててしまえ」

真人から奪い取ったりモコンでテレビ番組を梯子しながら、机に頬杖ついて口にした紫月に夕鈴は、むっと気分を害したように眉を寄せる。

そんな夕鈴に玄海は「夕鈴の気持ちは分かるよ」と前置いて「でもね、夕鈴」と話し始める。

「夕鈴の帰る場所はここなのだから、そんなに難しく考えなくとも大丈夫だよ。ただ、お友達を思うなら暫らく居場所などの詳細な連絡はしないほうが良い。一般の方を面倒ごとに巻き込ませてはいけないよ」

やんわりと父に告げられて夕鈴は、しょんぼりと肩を落とし頷いた。

兄二人

日常生活で汗をかくような季節は終わりを告げていた。

そんな中、夕鈴は道場で一汗も二汗もかかされていた。そして結局それに付き合っているのは雅ではなく真人だった。

「っは……も、駄目だって」

かくんつと、膝をついて泣き言を口にする夕鈴に真人は容赦なかったものの、限界も分からないでもない。

仕方ないな。と、嘆息して夕鈴とは対照的に息一つ乱していない真人は、脇に置いていたタオルとドリンクを掴んで夕鈴の前にしゃがむとふわりと頭から掛けた。

「お前体力値低過ぎないか？」

もうちょつと運動しろ。と、付け加えて、わしわしわしと頭を乱暴に掻き雑ぜられる。

普段なら絶対に怒るところだがその元気もない。

されるがままの夕鈴に苦笑して「ほら」とドリンクを手渡す。

「大したことしてないぞ？」

「明日絶対筋肉痛」

受け取ったドリンクに口をつけ少しずつ飲みながらばやいた夕鈴に真人は肩を竦める。

「俺は手加減したぞ？」

「真人ちゃんは体力値も運動能力値も私とは天と地の差があるんだよ。手加減も全然足りないっ」

「あんま加減したら練習にも何にもならないだろ。それに四六時中紫月と一緒にわけにも行かないだろうから……」

こんこんと、お説教めいたことを口にする真人にばれないように、夕鈴は小さく嘆息する。

心配性はこの家で雅だけではなかった。

夕鈴は通常の生活の中で、何か、がそう度々起こるとは思えなくて正直納得がいかない。不貞腐れた風な夕鈴の背後に回った真人は、ぽんぽん、と、肩を叩く。

まだぶつぶつと零しながらも夕鈴はそれに答えるようにドリンクを床に置いて、足を伸ばして座りなおした。

それと同時に、ぐー……っと真人が背中を押す。

「身体は柔らかいのにな」

簡単に膝に額がつくほど曲げられる夕鈴に、真人はしみじみと零す。

もっと多くのことを夕鈴には叩き込みたかったが、如何せん時間が足りなさ過ぎる。黙ってストレッチを補助をしながら、真人はぼんやりと夕鈴の矮小な背中を見つめた。

夕鈴が家を出るということを考えていなかったわけではない。

何れは出て行くことは覚悟していたものの……こんな形で、とは真人も考えてはいなかった。

「ま、真人ちゃん。重い」

「へ？ あ、ああつ！ 悪い」

しみりと感慨に耽っていたら夕鈴を漬しかけていたようだ。慌てて謝罪し身体を離れた真人が立ち上がるのに合わせて夕鈴もよいしょと立ち上がる。

「引越しの準備も要るのかな？ 要るよね……お泊り道具ってわけでもないだろうし、何を持っていったら良いんだろう？」

改めて汗を拭いながら、ぶつぶつと口にする夕鈴に真人はぼつり「平気なのか？」と零してしまった。

思わず自分の口から零れ出た台詞に慌てて口を押さえるが遅い。

願わくば夕鈴の耳に届いていないことも望んだがそれも期待薄だった。

タオル片手の夕鈴が、マジマジと珍しいものでも見るように真人の顔を見つめていた。

「驚いた。真人ちゃんでもそんな風に思ってくれるんだ……」

「お、俺は別に心配してじゃなくて、普通にお前一人でヘーキなのかと思って、だな」

顔がとても正直で夕鈴はころころと笑ってしまう。

「耳まで赤いよ？」

茶化した夕鈴に真人は眉を寄せて不機嫌全開で怒っているように口にする。

「うるっさい！ 大体お前は簡単に考えすぎなんだよ。お前は仕事を知らないから……こういうことに関わるものはお前の知っているような感情ばかりでは動かない。同情や情けを掛けては成せないことばかりなんだ。お前はそれを知らない……ずっと知らなくて良かったんだ。それなのに……」

「……ごめん」

「いーよ。お前のせいじゃない。きっと俺のせいだ……俺が……」

そのあと何事が呟いた真人の声は夕鈴に聞こえなかった。

真人ちゃんのせいじゃないよ。と、いいたかったのに夕鈴は真人の思い詰めた表情に、口に出すことが出来ず、ごめんね。と、重ねていた。

落ちた沈黙に耐えかねて夕鈴が「片付けようっ！」と背を向けると

「夕鈴……」

「真人、ちゃん？」

ふわり、と、後ろから真人に抱き締められていた。

何か言葉を続けようとした真人に気がつくことなく夕鈴は、はっ！ と何かに気がついたのか。

「えいつ！」

と、真人の足の甲を踏みつけ「っ！」と唸って腕の力が緩んだ。続けて、真人からすつと身を屈めてそのまま、ぐんつと伸びると、がつんっ！ と頭突きをお見舞いした。

「……っ痛……」

同時に夕鈴は頭を真人は顎を押さえる。
座り込んだ真人の方がダメージは大きい。

「い、今まともに入っただよね？ どう？ 完璧？」

頭頂部を両手で押さえながらそう聞いてきた夕鈴に、さっきの続きかと直ぐ納得した真人は床に蹲ったまま顔を上げることも出来ずに親指を立てて片手を持ち上げた。

やったーっ！ という夕鈴の歓喜の声が虚しく響く……。

雅は意図して空気を読まない感があるが、夕鈴はまるつきり空気の読めないところがあることを真人は忘れていた。

日が落ちると急に外気温が下がるようになってきた。

夕鈴が縁側の窓を全て閉めて部屋へ戻ると雅が既に部屋で待ち構えていた。

「いや、これは、多くない？」

どんつと机の上に詰められた古書を見て素直な感想を述べた夕鈴に雅はだよねえと頷く。

「本当はこの分全部目を通してもらう予定だったんだけど、ごめenne、間に合わなかったよ」

本当に申し訳なさそうにそう告げた雅に、夕鈴は間に合わなくて良かったな。と、ちよっぴり思ってしまったことはまさか口には出せない。

その代わりに「気にしないで」と微笑むと雅に良い子良い子と頭を撫でられる。

もうそんな風にされる年ではないことくらい、お互い承知の上ではあるが、長年の習慣的なものだ。

「そういえば、紫月は？」

九時から始まる二時間ドラマを真剣に見ていた紫月を掴まえて、明日からの生活に備え、和服では何かと不便だろうと無理矢理着替えさせたのを思い出した。

あの様子では、どこかで不貞腐れているのではないかと、気に掛けた夕鈴に雅は「庭のほうに居たよ」と机に体重を預け山積みになった本を一冊手にとってぱらぱらと捲りつつ答えた。

「紫月って引き籠もりだよねえ。夜になれば月ばかり見てるし……」

勉強する気の全くない夕鈴は、周り縁に続く障子戸を開けて庭から望める月を見上げた。

雅はその言葉に「ああ」と頷くと、夕鈴は知らないかな？ と、話し始める。

「紫月はこの屋敷……というかこの場所、土地、かな、それらに縛られてるんだ。出たくても出られない」

雅の台詞に夕鈴は「え？」と振り返り首を傾げる。

「僕らは許されたものだから気にならないかもしれないけれど、ここは外からのモノの侵入を防ぐために囲われてるんだ。そして、それは中のモノを逃がさないためでもある。これまで色々と夕鈴が解放しても騒ぎにならなかったのはそれらのモノが外には出なかった

からだよ。紫月も当然そのせいでこの屋敷の敷地内から出ることは叶わない……主の許しがなくてはね」

主という言葉に夕鈴は「あ」と声を上げる。

「もしかして、私紫月に悪いことしてたかな。外、出たいよね……やっぱり」

そのせいばかりとはいえないだろうが、そのためにテレビに釘付けだったり新聞を山積みしたりしていたのなら申し訳ない。と、夕鈴はしょんぼりと口にした。

そんな夕鈴に雅は手の中の本をぱんつと閉じて同じように月を仰ぎ口を開く。

「さあ、どうかな。紫月は囚われることを望んだ身だから。変わらないことが至福だと思ってると思うし……」

例えばあの月のように、ね？ と微笑んだ。

夕鈴には雅の笑みの意味までは分からない。

紫月の月を仰ぐ気持ちも分からない。

でも、変わらないことを望む紫月に変化を与えてしまった自分は、やはり彼に悪いことをしたのではないかと肩を落とさずにはいられなかった。

神無台

翌朝早く夕鈴と紫月は家を出た。

用意された車に乗り話題に上がった神無台へと赴く。

神無台は山を切り開き出来上がった山に囲まれた新しい町だ。

暫らく夕鈴は流れていく景色を眺めていたがそれに飽きて、出掛けに父から預かった転校先の資料に目を通す。

私立碧葉台学園、初等部から大学部まで揃っている大きな学園のようで、これならあの短期間に調査が出来なかった理由も頷ける。

「上手くやれるかな？」

「知らん」

紫月は出掛けから機嫌が悪かった。

無理矢理和装から洋装に主命令を行使して変更させたのも気に入らないのかも知れない。

「良く似合ってるっていつてるじゃない」

とりあえず、子ども服は直ぐに出てこなかったため通常サイズに戻っていたき雅の服を拝借した。

モード系で秋らしい色合いも良く似合っていると素直に思いつつ、似合い過ぎて逆に和装より悪目立ちするのではないかと思われたが、子どもに戻ってくれたお陰でどこかお育ちの良いお坊ちゃんに納まった。

「じゃあ、どうして怒っているの？」

「怒っておらん」

むすつ、と、した顔でそういわれてもそうですかとはいえない。
益々眉を寄せた夕鈴から紫月は顔を逸らしてぼつりと零す。

「初見のものばかりで……慣れん」

紫月の白い肌がほんのり朱に染まって見えて夕鈴は、ふっと笑みを零した。

初めて紫月を可愛いなどと思ってしまった。

「テレビとかで色々見てたでしょ？ 分かってたんじゃないの？」
「板の中のものを見るのと現物とでは違う。それに……」

いいかけて紫月は黙し、車窓から流れていく景色に顔を向けた。
その横顔に夕鈴は夕べの雅との話を思い出す。

—— …… 囚われることを望んだ身。

夕鈴はその言葉に引つかかっていた。
雅は夕鈴がそれ以上知る必要ないと詳しくは聞かせてはくれなかった。
った。

追求は本人にするしかないだろう。

しかし、その機会は到底巡ってきそうにはない。
ちらりと隣を見ればドアに肘を預けて頬杖をついた紫月は、気だるそうに欠伸を噛み殺したところだった。

屋敷の中なら愛刀を握っているか仕舞いこんでいるかの左手が手

持ち無沙汰だ。

「刀、早く戻ると良いね」

ぼつり……と、そういつた夕鈴を紫月はちらとだけその姿を見て
「ああ」と短く答える。

門扉までそれを手にしていたのに、見送りに出ていただけのはず
の雅に刀はあっさり取り上げられた。

「まだ、持ち出し禁止」

と微笑まれて。

紫月は文句をいいそうなものだったが、夕鈴の予想に反してあつ
さりと刀を諦めた。

「ちゃんと手順を踏んだら届けるよ」

「ワシは性急にはいわんが……」

「うん。急ぐよ」

二人の意味深なやり取りに夕鈴は疑問を持ったものの、兄に限つ
て自分たちに不利益なことをするとは微塵も思わないため、特に触
れなかった。

それに何より真剣を自由に持ち歩けるような時代でもない。

本物だと思ふものも少ないだろうが。

「……それにしても山だね」

辺りが木々に覆われて昼間だというのに暗い。

道路整備は行われているものの対向車もとても少ない。

一体どこまで連れて行かれるのかと不安になるような景色に思わず口にした夕鈴に運転手が答える。

「山を越えれば開けますよ。全然様子が違いますから、きっと驚かれますよ」

その言葉に頷いて夕鈴はぼんやりと外を見ているとうつらうつら船をこぎ始めた。

昨日、真人との稽古が長引いたせいだろう。

車の揺れに合わせて揺れる体は、がくん……っ、ときた震動にぐらりと紫月の肩の上に落ちた。

紫月は、ちらと見たものの面倒臭そうに嘆息しただけだ。

どう見ても寝苦しそうにしか見えないのに夕鈴は起きる気配がない。

だが、やはり辛かったのか、短く唸ってぼんやりと目を擦りながら頭を上げたものの直ぐに寝なおした。

今度は膝を拝借して……。

「—— …… 鈴、夕鈴。起きろ」

「もう、あと五分」

「だ、そうだぞ。良いのか？」

まどろみの中で交わされる言葉に、夕鈴はゆっくりと頭の中がはつきりとしてくる。

そしてどこか諦めにも似た声色で「では、あと五分お待ちしましょうか……」と聞こえたところで、がばりっ、と起き上がった。

「雅ちゃん?! 遅刻っ?」

「……誰が雅じゃ」

冷やかな目で紫月に睨みつけられ「あ、紫月。あれ? 痛い」
いいつつ腰を抑えた夕鈴はやっと現状が理解出来たらしく、慌てた様子で髪の毛などを梳き整え、すうっと冷たい風が入り込んでくるドアを見た。

既に到着した先で開け放たれたドアの前では、恐らくこれから世話になるのだろう家主たちが待ちぼうけてた。

慌てた夕鈴はそのまま立ち上がり天井に頭をぶつけてから、よろよろと外に出て腰を折った。

「ごめんなさい。えっと、その雪杜夕鈴です!」

同じように対面していた細身の女性も慌てたように腰を折った。

「邪魔だ、どけ」

あとから出てきた紫月はドアの前に居た夕鈴の膝の裏を蹴った。
当然、膝が折れ前のめりになった夕鈴は反射的に腕を伸ばしてくれた女性もろとも地面に膝をついた。

「しーづーきー」

恨みがましい目で睨みあげても紫月は全く気にしないといった素振りで「詰まっておるからだ」と悪びれる風もない。

夕鈴は、ぶうっと膨れ面を作ったものの全くそれに効果はないと直ぐに判断し、立ち上がるとよろけていた婦人にも手を伸ばした。

立ち上がった女性は軽く身なりを整えると、やんわりとした穏やかな笑みを浮かべて改めてと頭を垂れる。

「夕鈴様、紫月様。事情は窺っております。現在、主人が不在ですが滞在のうちは我が家と思ってお寛ぎください。わたくしは源葛犀みなもとのかさいと申します。娘の鈴奈と共にこの屋敷を主人の留守を預かっております」

その仰々しさに、夕鈴はたじろぎ動揺したが紫月は「面倒は良い。早く案内しろ」と顎を杓った。

反射的に紫月の額に手刀を浴びせようとしたら、あっさり避けられて夕鈴は「避けない」と目くじらを立てる。

「紫月、お世話になるのは私たちなんだよ！」

「馬鹿者。こやつらはそれが役目だ」

「役目でも、何でも！そこに胡坐をかくのは良くないでしょ！」

「別にこそそする必要も無かろう」

「そうじゃなくて紫月のはふてぶてしいっていの」

むー……っ、と埒の明かないいい争いを繰り広げている二人を順番に見て「あの」と葛犀の声は耳に届かないらしい。

車を運転してきた運転手も荷物を屋敷内へ運び入れて戻ってきてみると、その騒ぎに目を丸くしていた。

そして、二人の騒ぎを止めたのは

「鬼だ」

不意に掛かった子どもの声だった。

運転手について屋敷から出てきた小柄な少女が紫月を遠慮なく指

差して告げた。

指差している本人と紫月を交互に見た夕鈴は、はたと我に返り「帽子はっ?!」と声を上げる。

「邪魔だ」

「邪魔じゃない。角隠せないじゃん!」

「こんなもの見えるものにしか見えん」

あっさりとした紫月の台詞に見えるもの? と、繰り返して夕鈴はゆっくりと少女を振り返った。

少女は葛犀に手を押さえられ無理矢理下ろされていた。

そして、夕鈴と目のあった葛犀は「わたくしには目視出来ません」と困ったような笑みを浮かべて口にした。

「この子は鈴奈。先程、名の挙がったわたくしの娘です。わたくしは完全に外部の人間ですがこの子は僅かながらに力を持ちます。子どものということです。どうぞお許し下さい」

妙にびくびくとそう口にする葛犀に夕鈴は切なくなつて「大丈夫ですよ」と微笑んだ。

突然、妙な同居人が増えるのだそれを良しとしないのは分からなくもない、分からなくもないものの……出来れば仲良くしたいと思つていた夕鈴にとっては葛犀との見えない壁がとても厚いような気がした。

とりあえず、中へどうぞと招き入れられた。

鈴奈はにこにこ人懐っこい笑顔で夕鈴の手を引き興味ありげにちらちらと傍の紫月を盗み見る。

雪杜家には遠く及ばないものの、敷地面積は百坪くらいはあるだろう。

半二階建ての歴史を感じさせる日本家屋だ。

案内されたのは二階の一室だった。

八畳ほどの部屋で本間の為かとても広々とした雰囲気がある。

床の間の掛け軸と生け花にも、秋を感じる風情がありとても清々しい空間だ。

紫月にも続きで同じづくりの部屋が用意されていた。

転校生

人懐っこい鈴奈に夕鈴は家の中を案内してもらった。

紫月はもちろん面倒の一言で部屋に引き籠もり、窓辺に腰掛けて窓から見られる街並みを眺めていた。

「あっちが、お風呂で、あっちが台所……離れは蔵になってるけど鈴奈は近づいちゃ駄目だっていわれてるの」

時々入っちゃうんだけど。と、きやらきやらと子どもらしい笑いを零した鈴奈に夕鈴は苦い思いがこみ上げてやんわりと口にする。

「入っちゃ駄目だっていうところにはそれなりの理由があるものだから、入っちゃ駄目だよ。後戻りが出来なくなったら大変だから……」

……

かろうじて私みたいに、という言葉は飲み込んだ。

鈴奈はどうしてそんな風に夕鈴が口にするのか分らないという風ではあったものの「同じ鈴仲間だから覚えとくね」とにこりと微笑んで首肯した。

翌朝早く、鈴奈の案内で碧葉台学園に向った。

車を回すといわれたもののどうせ暫らくの間毎日通う道だから、徒歩圏内であるのなら歩きで良いと断った。

道すがら鈴奈の落ち着きのなさぶりには、夕鈴も頭を抱えそうになったが、その腕をがっちり確保することで真っ直ぐに目的地へ向

うことが出来た。

町の様子を見ながら行こうと思ったのにそれは叶わない思いのようだ。

長い階段を昇った先の広大な敷地にその学園はあった。

いくつか上り口はあるらしいが、今回は夕鈴が高等部に入るということで直接高等部へと続いているところから入ってきた。

鈴奈は校舎の入り口で夕鈴に口頭にて職員室までの道を教えると、さつさと中等部まで走っていつてしまった。

「……大丈夫かな」

その後姿を見送って小さく溜息。

まだ時間が早いいためか、生徒の姿は疎らで朝練中なのかジャージ姿の生徒も目に付いた。

一人で新天地に乗り込むのは初めてであつたため不安でない。といえは嘘になるが……そんなことをいつている余裕もない。

手続き等は玄海が全て済ませているから職員室に行けばあとは大丈夫だと電話ではいわれていた。

夕鈴は肩に掛けていた鞆の紐をぎゅっと握りなおして、一つ深呼吸。

そして校舎へと入っていった。

まだ出来て間もなく歴史も浅い学園の校舎は以前夕鈴が通っていたところに比べると随分新しく近代的なつくりになっている。

鈴奈の話では玄関を入って正面の階段を登って、右に折れて渡り廊下を渡ってということだったからその通りにしたもの、良く考

えたら……違う制服の学生がうつくと目立つ。

校舎が違うなら外側から廻れば良かったとすれ違う生徒の視線を背中に受けた夕鈴は身を縮めた。

「――……職員、室」

夕鈴は扉の前で札を見上げて確認の意味をこめて読み上げた。
そして、間違いないと頷いてからノックをする。

「面倒だからさっさと入って」

にゅっと伸びてきた腕が、夕鈴が手を掛けた上から手を乗せてさっさと扉をがらがらと開いて動揺する夕鈴を無視して追い抜いてから、あ、と振り返る。

「もしかして、転入生？」

白衣の裾を翻した教員は、興味深そうに夕鈴に歩み寄って顔を覗き込む。

そして、おずおずと首肯した夕鈴ににこりと微笑んだ。

「季節外れの美少女転校生かー、生徒が騒ぐだろうなー」

ふんふんと一人で納得して面白そう。と、不吉な台詞で締め括ってから、校長のところに案内してあげるよーと夕鈴の手を引いた。
机と机の間を縫って一番大きな机の奥にある少しだけ仰々しい扉に軽快なノック音を響かせる。

中からの返事を待って一応扉は開かれたが、ノックの仕方によはり室内に居た初老の男性は苦い顔をしていた。

「もう少し丁寧にノック出来ないものかね？」

「はあ、すみません。あー、そこでうちのクラスの転校生を拾ってきたんで一応連れてきたんですけど、教室直行で良かったでしたっけ？」

にこにこ人好きのするような明るい笑顔を浮かべて頭を掻いた教員に、校長は短く嘆息してとりあえず座りなさいと、部屋の中央にあった応接セットへと促した。

校長室のソファは柔らかく緊張していた夕鈴の気持ちを解すようにふわりと包み込む。

夕鈴たちが腰を落ち着けたのを見計らって校長は挨拶もそこそこに生徒手帳と校章を渡して「あとのことは担任である真澄先生ますみに聞くの良いですよ」と優しく微笑んでくれ夕鈴も同じように笑って頷いたものの隣に座る人物には些か不安が残る。

校長室から出た後は、職員室にて真澄と選択授業についての話をしたりしたあと、ショートホームルームの時間に合わせて教室の前まで到着した。

真澄には呼ぶまで待っているようにいわれ夕鈴はぼんやりと廊下から見える中庭を眺めた。

庭を挟んだ反対側はさつきまでいた職員室だ。
担当しているクラスのない教師などがまだ少し残っている。

廊下からは教室の中の様子は窺えないものの時折漏れてくる声に

耳を傾けていると急に扉ががらつと開いた。

余りに急で思わず体勢を崩した夕鈴は「お？ 大丈夫か？」と真澄に支えられ、こくこく、と、頷いて促されるまま教室に入った。

ざわついた教室内で奇異の目を向けられるのは正直気持ちの良いものではないが、学期の途中から入ってきた生徒だ、それも仕方ないだろう。

「ほらな。先生のいった通り美少女だろう。ほい、雪杜、自己紹介しろ」

上手く場を繋いだとばかりに、にかつと笑った真澄に夕鈴は恨みがましい気持ちになる。

変にハードルを上げられてしまった感が否めない。

楽しげに生徒から茶々が入るのを真澄は改めて制した。

「雪杜、夕鈴です。よろしくお願いします」

ぺこりと頭を下げた夕鈴に「それだけか？」と真澄は不満そうだ。

ないです。と、首を振った夕鈴に真澄は教室を見渡してそれじゃあ、質問は……と口に仕掛けたところで、がたりつと正面の男子が席を立ち手にしたペン先を夕鈴に向ける。

「季節外れの美少女転校生の取材は、この新聞部長である僕大河内が責任を持って引き受けようじゃないかっ！」

妙に芝居がかった大河内の台詞に夕鈴は、え、と声を詰め一步下がる。

「雪杜君といったね？　まずは基本データから、誕生日は？」

「え、四月二十二日です」

「血液型は」

「O型です」

「家族構成は？」

「え、父と兄が二人居ます……」

ぽんぽんと投げ掛けられた質問に反射的に答えてしまった夕鈴に、気を良くしたほかの生徒が混じってくる。

ちよつと待ちたまえっ！　という大河内の台詞は無視だ。

何となく彼の立ち位置が理解できた。

「好きなタイプは？」

「え、えと、普通の感じで……」

「彼氏は居るの？」

「いないです」

「え！　どうして？　モテたでしょう」

「いえ、そんな経験ないです」

その答えにクラス中がどよめいたことに夕鈴はもう一步下がる。

そこで、おっと、と真澄に背中を支えられ「制服汚れるぞ？」と前に押された。

黒板に背中がつくところだったらしい。

「はい、静かにー。お前ら、そのくらいにしとけ。んじゃ、雪杜は野獣たちから護ってくれるだろう、和葉の隣ー、みなとの後ろに座れ」

ぽんぽんつと真澄に背中を叩かれて夕鈴が教室内をきよろきよろとすると、こっちこっちと手招きしてくれる女生徒二人と目が合つて、ほつと安堵したように微笑んでから夕鈴は一番後ろの席へと落ち着いた。

よろしくね。と、笑顔を見せてくれた二人に夕鈴も頷いてよろしくと返す。

そして真澄がどうして護るなんて表現したのか、二人の自己紹介で合点がいった。

井上和葉の方は女子空手部の部長、津嶋みなとの方は剣道部の部長をやっているらしく、その戦歴も輝かしいものだということだ。

「雪杜、雪杜つて、なんかどこかで聞いたことがあるんだよねえ……」

いつて首を傾げた和葉に、夕鈴も軽く首を傾げる。

この土地には昨日初めて入ったのだ。知り合いが居るとは思えないし、一見して和葉が雪杜家の家業の世話になるタイプの人間にも思えなかった。

「気のせいだつて、こんな可愛い子知ってたら覚えてないわけないじゃん」

夏の太陽のような笑顔でそういったみなとに夕鈴は頬を赤らめたが和葉はそれもそうだよ。と、頷いた。

休み時間になり他のクラスからもどやどやと見物客が訪れたのも軽くあしらってもらい、夕鈴は胸を撫で下ろした。

町先案内人

放課後になり二人が校門付近まで見送ってくれたにも関わらず、二人が部活へと向ってしまったら夕鈴は大河内に掴った。

「待ってたんだよ！ この瞬間を！」

このテンションは基本なのだと一日で夕鈴にも理解出来た。今まで自分の周りには居なかったタイプだから正直扱いに困るものの、悪気があるわけではないのだろう。

取材を兼ねて町を案内しよう！ という大河内を無碍にも出来なかった。

大河内の話が本当なのか冗談なのか夕鈴には判断できなかったが、まだ新しさを感じるレンガ道を歩きながら、どうしてこの場所が神無台などと呼ばれるようになったのか？ というような話を語ってくれた。

「――……つまりだね、この土地には神様からの恩恵がなくなってしまったから、神の居ない台地ということで神無台となったわけだ」

分かるかな？ と話を締め括った大河内に夕鈴はうんうんと頷いた。

「大河内君は地歴に詳しいんだね？」

にこりと告げれば「新聞部の部長として当然だよ！」と胸を張られる。もちろんそれが当然かどうか夕鈴には分からない。

「あ、そうだ。大河内君なら知ってるかな？」

夕鈴はそんな大河内の様子に、ふと思いついてそう声を掛けるとがさがさと鞆の中を漁った。

そして取り出したのは少し前の新聞記事だ。

家にあつたものは処分されてしまっていたので、図書館でコピーをとらせてもらった例の吸血鬼事件の物だ。

「この被害者の子、この町の子だと思うのだけど……学校とか家とかが分からないかな？」

どれどれ。と、夕鈴からコピーを受け取った大河内は「ああ」と眉を寄せる。

「うちの学校の生徒だよ。この辺りの殆どはあの学校に通ってる。よくこんな小さな記事を見つけたね？」

うんうん。君の注意力は大したものだ。と、深く頷いた大河内に気がついたのはうちの鬼ですとはいえなくて夕鈴は曖昧に微笑んだ。

「家……も、分からなくはないのだけれどね。雪杜君はお友達。というわけではないのだろう？ 面識のない人間を会わせたりはしないだろう。好奇の目に晒されるのはうんざりしているはずだから」「やっぱり、騒ぎになったのかな？」

「……騒ぎ、か……そうだね。雪杜君はまだ生徒会には会っていないのだね？」

「生徒会？ この子生徒会の子なの？」

夕鈴の疑問に大河内はうーんと唸ったあと「元だね」と呟いて続ける。

「元、そう彼女は退任したんだよ。書記だった。しかし、だ、事件のあと辞めた。今は空席になってるけれど、噂では呪われている、なんていわれていてね、その席に就くものがないんだよね。今…」

「……私なれないかな？」

「っ！ な、何をいい出すんだいっ？！」

「え？ あ、ごめん。無茶だよ。きつと選挙とかで決めるんだよね役員も……」

あはは。と笑った夕鈴に、大河内は君は聞いていたのかい？ と重ねる。

「なるものが居ないといっているんだ。呪われているから」

「大河内君はそれ信じてるの？ 記者さんなのに？ 呪いとか、お化けとか幽霊とか」

にこにこつと口にした夕鈴に大河内は「まさかつ！」と大きく出た。もちろん夕鈴は信じているリアルに体感しているから。でもそれは伏せた。

「僕はリアリストだよ。目に見えるもの以外信じてないねっ！」

胸を張った大河内は、ふむつとやや考える素振りを見せてから口にする。

「雪杜君はこの事件の関係者なのかい？」

夕鈴は首を振ったが大河内は聞いていない。そうか、それならば……と勝手に話を進めている。まずは被害者である生徒に会ってみよう！　ということになった。

さっきまで会ったのは難しいんじゃないか？　と、口にしていたのは自分だということは、もう彼の頭にはないのだろう。

「僕の記憶しているところだと、確かこの辺なんだ」

季節が変わってくると日が沈むのも早くなる。空は茜色から薄紫へと徐々に変わってきていた。

大河内の記憶を頼りに町を彷徨い、随分歩いたような気がする。

明日ちゃんと場所を確認して……。そう切り出しかけて、夕鈴はポケットの中が震えるのに気がついた。

「大河内君、ごめん、電話だ」

「構わないよ。探してるから」

断りを入れた夕鈴に大河内は力強く頷いて足を止めた夕鈴から離れていく。

取り出したケータイのディスプレイを見れば雅だ。夕鈴は、その表示された名前に微笑んで、ぴっと取り上げる。

「もしもし、雅ちゃん」

そっと耳に押し当てて、声を出すと、どこか遠い。でもはつきりとした声が聞こえてきた。

『夕鈴、今、大丈夫？』

「うん、平気だよ」

『今日から新しい学校だったんだよね？　大丈夫だった？　嫌なところかいわれなかった？』

話の内容は大抵予想通りのものだが、予想通り過ぎて夕鈴は少し笑ってしまった。

その笑いの意味が分からなくて『夕鈴？』と不安そうな声が聞こえてくる。

「大丈夫、大丈夫だよ。クラスの子も良い人ばかりだよ。困っても隣の席になった和葉ちゃんやみなとちゃんがフォローしてくれるし、なんとかやれそうだと思うよ」

『そっか、良かった』

本当に心配していたのだろう、雅は夕鈴の返答に声の色が変わった。

「そうそう、例のこともなんだけど……」――

「雪杜君、あったよ！　あの角の家だ」

続きを話そうとすると、大河内が大きく手を振って駆け寄ってきた。まだ電話中だった夕鈴に「ごめんよ」と大河内は小声で詫びた。夕鈴はマイクを軽く押さえてケータイを少し耳から離すと「ちょっと、待って、直ぐ終わるから」と告げ再び耳に戻す。

『夕鈴、まだ、戻ってないの？　今の誰？　紫月じゃないね？』

あからさまに雅の声は険を含んでいたが、そんなことに夕鈴は気がつかない。

「うん。同じクラスの大河内君。町を案内してもらってるの……そ

れでね」

『そう、でも、暗くならないうちに帰るんだよ？』

「大丈夫だよ。ありがとう、心配してくれて、じゃあ、切るね」

—— ……ぶち

ケータイをポケットの中に仕舞いこんだ夕鈴は、ごめんね、待たせて。と謝罪して「行こうか」と歩き始めた。大河内は並んで歩きながら「お兄さん？」と問い掛ける。

凄い！ 良く分かったね。と、屈託なく笑う夕鈴に大河内は得意気に笑った。

「勿論だよ！ 今朝のホームルームでお兄さんが二人居るといつていたじゃないか。この時間に電話なんて、余程可愛がられているんだね？」

それは切る直前に「分かった、帰ったらメールするよ」といつていたことから大河内は確信を持っていた。

「うん。あ……、この家？」

先程大河内が指差していた家の門前に来て足を止めた。夕鈴はなんと切り出したものかと少し思案したが大河内はさっさとインターホンを押してしまった。

止める隙は全くなかった。

—— …… もちろん。撃沈した。

夕鈴もまあそうだろうなと思ったけれど、一応被害者の自宅が分かっただけでも一日目にしてはかなりの収穫だと思われて満足だった。

た。

それから源家の傍まで送ってもらい、その道すがら生徒会が呪われているらしい話を続けて聞かせてもらった。

生徒の自主性を重んじている校風なため碧葉台学園は生徒会が中心になってイベントごとを取り仕切ることが多いから名誉職とも思われるのに、ここ数ヶ月でどういうわけか書記だけがなっては辞退するというのを繰り返しているというのだ。

そして公になった事件は記事になったその一件だけだが、生徒の間では書記になったものにだけ訪れる悪夢があるらしい。

「夕鈴」

角を曲がれば源家の門が見えてくるところで声を掛けられた。見れば紫月だ。自ら屋敷の外に出ているのは珍しい。

「ただいま、紫月」

「誰だ、その男」

にこりと挨拶した夕鈴を見ることなく紫月は隣に居た大河内を見上げる。

夕鈴が基本洋装で生活したほうが良いと口がすっぱくなるほどいつたにも関わらず、紫月はいつも通り深い藍色の和服姿だった。

「僕は碧葉台学園随一のホープ！おおこ……」

「まあ良い。ワシも今戻ったところじゃ、茶にする」

大河内の台詞を最後まで聞くことなく、そういつて踵を返した紫月に夕鈴は、え、ああ、うん。と頷いて大河内にまた明日と手を振るとその姿を追いかけた。

「……新しいコスプレとか何かかな？ 特に、あの額……」

門の奥へと消えていく二人を見送ってから大河内は首を傾げたが、まあ良いかと満足気に頷いて家路に着いた。

電話

「帰りってどこかに出掛けていたの？」

「ああ」

普通こういう流れならば、どこに行っていたと答えるのが定石だろう。

あまりに簡素な返答に夕鈴は眉を寄せる。

「どこで何をしていたの？」

質問を重ねた夕鈴に紫月は酷く面倒臭そうに嘆息して、散歩と答えた。そして、仕方ないとばかりに会話を続行する。

「ここから見える景色だけでは分からぬから、様子を見に出ただけじゃ。夕鈴が自由にしている構わないといったのだから、ワシがどこで何をしようと構わぬのだろう？」

やれやれと続けた紫月に夕鈴は、そうだけど……、と口籠る。

夕鈴にとって家に帰れば家に居る誰かと今日どうだったという話をするのは、至極当たり前のことだった。だから、訪ねただけだったのだが、それを面倒に感じるものが居るとするのはほんの少し寂しい。

「この町は特殊だ。神が存在しない。だが枯渴しているわけではない……こういうところには溜まりやすいのは確かだ」

そんな夕鈴の心情を果たして紫月が汲んだのかどうかは分からない

いが、窓の棧に腰掛けて、紅く染まる空を睨みつけながらそういった紫月に夕鈴は「神……？」と返す。

「土地の清浄さを示すものだ。大抵の土地には神の拠り所、社があり、土地を浄化する。ここには今日ワシが見て廻った限り、社が一つもない。形だけのものもない。そういう場所は少ないだろう？」

ふつと口角を引き上げて問い掛けられれば、夕鈴は首を傾げつつも、まあ、そう、だよ。と頷いた。

「ワシは心地良くも感じるが、雅辺りは好まない土地じゃろつな」「雅ちゃんが？」

「ああ。不浄なものを送り込む先がないからな。面倒臭いだろう……」

いや、奴らは、滅する専門だったかの……ぽつりと零して頷くと「で？」と首を傾げられた。

「え？」

「え？ ではない。夕鈴は何か収穫はなかったのかと問うておる」

僅かに苛立たしげな様子を見せた紫月に夕鈴は、ああと得心して得意そうな顔で今日の出来事を告げた。

夕鈴にしてみれば一日で被害者の自宅まで足を運べたのは凄いとだったのだが紫月にいわせれば

「収穫なし、か……」

と纏められてしまった。

夕鈴は紫月のその残念な反応に「ちえっ」と零してから、先程、雅の名前が出たことでメールをするというのを忘れていたことを思い出しケータイを取り出した。

パチンッ！

多少乱暴にケータイを閉じた雅は不機嫌を隠すことなく傍に居た真人にぼやく。

「夕鈴に変な虫が付いてる」

「まあ、付くだろうな。そんなに見目悪くないからな」

「どうしてそんなに冷静なの？ 真人」

「いや、俺は今飯の支度を……」

台所で小気味良い包丁の音を響かせている真人のやっていることくらい直ぐに分かる。雅は「そんなの関係ないよ」と眉をひそめ、ぶつぶつと続ける。

「なんとも理由をつけて真人もついていけば良かったのに」

「仕方ないだろう？ それが頭首の判断だったんだから。俺は付き添いに必要ないって、まあ、実際、欠片を見る目を持つのは夕鈴だけだし」

「——……それを保持保管出来るのは、紫月だけ……分かってるよ。そんなこと」

まるで子どもが駄々をこねるようにそういった雅に「だったら」

と続けそうになって真人は口を噤んで押し留めた。

「真人だって、突然どこの誰とも知れない輩が夕鈴を下さいなんていったら許さないよね？」

話を飛躍しすぎだと、誰か突っ込んで欲しいところだが生憎この場には真人と雅の二人しか居ない。

真人は大きく嘆息して、包丁を置くと雅を振り返る。

「……俺は許す」

「え？」

「大体、夕鈴が選んできたんだろう？ それをどうのこうのというのは良くないと俺は思う」

「思わないね！」

即答。

「絶対無理だね。僕は許さない自信がある。大体夕鈴は箱入り娘なんだよ。騙されてるに決まってる。そんな奴、僕の屍を超えていくくらいじゃないと無理だね」

普通の人間に、雅を超えるなんて無理だろう。この調子では、夕鈴は確実にいき送れるだろうと真人は苦い笑いを零しつつ

「ていうか、雅は例の刀清めてたんじゃねーの？」

まだ「今すぐいつて釘を刺したほうが良いかな？」とか「それとも、いつそ烏でも使って……」ぶつぶつ縁起でもないことを口にしていたが、真人の問い掛けに「そうだよ？」と微笑んだ。

「この家から持ち出すのだから一片の曇りも残すわけにはいかないからね。あの刀がどれだけの血を吸ってきたか知らないけど……あんな重い刀は珍しいよ」

いいながらも、少し浮き足立っている感じがする辺り雅も好き者だと呆れたように、真人は笑いを零す。

「それを早く片付けて、大好きな夕鈴ちゃんに会いに行く口実になれば良いだろ？」

雅ちゃん。と、意味ありげに締め括った真人に、雅は刹那きよんとしたあと

「そうだよね！ 真人偉いな。うん。早く終わらせよう。楽しんでいる場合じゃないや……」

楽しんだのか……という突っ込みは真人にはもう無理だった。雅は夕鈴の前では良い兄であり常識人に見えるが、正直真人の前では唯の変人だ。

さてと踵を返しかけて、雅は手の中のものが震えたのに気がついた。

ケータイの液晶画面に表示された文字を見て、ふわりと笑みが零れる。

確実に相手は夕鈴だろう。

何かを切り替えるためか、大きく一つ深呼吸してから雅は電話に出た。

「―― …… おかえり。どうしたの？ メールで良かったのに」
『うん、さっきはゆっくり話せなかったから、やっぱり電話にしようと思って』

電話越しに聞こえてくる可愛い台詞に雅は「そう」と答えつつ、真人にひらひらと片手を振って部屋の奥へと消えていった。

その後姿が見えなくなるまで見送ってから、真人は作業を再開した。

生徒会

翌日、教室に入るなり夕鈴はみなとと和葉に捕獲された。え？
あ？ 何で？？ と疑問符に包まれる夕鈴を他所に詰め寄る。

「昨日、大河内と二人だったって本当？！」

「え、ああ。うん……町を案内して貰ったんだよ」

何を聞かれるのかと思ったらそんなことだったので、夕鈴はほつと胸を撫で下ろした。しかし、二人は声を揃える。

「「町くらいわたし達が案内してあげるから、あんな危険人物というか、変人と一緒にしちゃ駄目！」」

長い台詞を一言一句違わずに良く揃えたなと夕鈴は感心した。
その様子に二人は意図がちゃんと伝わっていないことに気がついて尚重ねようとすると

「こんな所に居たのかい？ 雪杜君」

と聞き馴染んでしまった声に肩を強張らせた。

夕鈴は、にこりと問題なく「おはよう」と答えたが、みなとはずいっと大河内の前に立って鼻先に右の人差し指を突きつける。

「お・お・こ・う・ち！」

「如何にも僕は大河内だが？」

「んなこと、分かってるわよ！ 夕鈴に馴れ馴れしくしないでよ。
あんたの個性についていけるわけないでしょ！」

「んー？ それは褒めてくれているのかい？」

「「褒めてないっ!!」」

声を揃えた二人に大河内は、あははと笑い「相変わらず君たちは仲良しさんだね」と不屈の精神を見せ付けた。

そして、まだ文句をつけたそうな二人を片手で簡単に制して「それでね」と夕鈴に話しかける。

「今日の放課後、取材を取り付けておいたよ」

「え？」

「気にしていただろう？ 生徒会。だから、その生徒会の今の様子を探ろうとこの僕が直々にアポを取ったのだよ」

褒めてくれても構わないよ？ と胸を張った大河内に、二人は目をむき難色を示したのに対し、夕鈴は喜色を示した。

「あんたっ！ 何考えてるのよ！ 今生徒会なんて鬼門に決まってるでしょっ!」

「わざわざ、今、そんなところに夕鈴が行く必要ないし」
「行くよ」

夕鈴を生徒会と関わらせまいとする二人の気持ちは分からなくもないが、夕鈴はしっかりと頷いた。

「私は何をすれば良いの？」

「インタビューアは荷が重いだろっから、君はカメラマンを頼むよ」

いつてどこから出てきたのか一眼レフのデジカメを夕鈴に握らせた。

「ちょっと、大河内、あんたね……」

止めるみなとの声を無視して「それじゃあ、放課後にね」と大河内は賑やかに教室を去っていった。これからショートホームルームが始まるのだがどこへ行くつもりだろう？

「夕鈴も、あんまり興味本位で行くようなところじゃないと思うよ？」

その後姿を見送って、和葉ががつくりと肩を落としつつ夕鈴に重ねる。

「ありがとう、心配してくれて。大丈夫だよ……きつと……、あ、でも良かったらその生徒会の話、二人の知っている範囲で聞かせて？」

にっこりとそう続けた夕鈴は、もう梃子でも動きそうにはなかった。

「んつと、電源を入れて、押せば良いんだよね？」

「ああ、そうだよ。まあ、もし失敗しても構わないよ、生徒会の写真なら山ほどあるからね」

今朝方渡された一眼レフのデジカメを眺めながら、そう確認した夕鈴に大河内はそういつて高らかに笑った。どういうこと？ という風に夕鈴が首を傾げれば大河内はにやりと口角を引き上げる。

「生徒会の写真は良く売れるから良く撮ってるんだ。だから、平気

というわけさ。部費だけじゃとても賄えないからね？ 緊急時の資金源」

ああ、前知識として見ておくかい？ と続けて胸ポケットから数枚写真を取り出した。夕鈴は手にしていたカメラを首に提げて、写真を受け取った。

「今の生徒会になってからのものだよ。一番上が会長の志宮菖蒲しのみやあやめ一部のファンに宮様と呼ばれている人で、気位が高く高慢ちきな人だよ」

「えっと、それはカリスマ性があるとか？」

「うん、まあ、物はいいようだね」

恐らく大河内にだけはいわれたくないだろうなと、夕鈴は思ったがとりあえず飲み込んだ。大河内の意見は置いておいたとして、夕鈴が見た写真の女性は純和風の楚々とした令嬢に見えた。育ちの良さが滲み出ている雰囲気だ。みなとたちからの話に聞いたところでも”宮様”はそういう雰囲気的女性だった。

ぺらりつと次の写真に移れば、全く会長とは印象の違うタイプだ。性別から違うものの、雰囲気はどこか日本人とは異なっている気がした。

「彼は、副会長の恩曾太郎君だおんそたろう」

「え？」

「だから、恩曾君だよ？ まあ、みんなルウと呼んでるけれど」

「何故っ？！」

反射的に突っ込んでしまった。そんな夕鈴に、大河内は満足気にやりと微笑むと話を続けた。

「その逸話は色々合ってね。結局、自分で適当に愛称というやつを作ったんだよ。変わり者だから」

上には上が居るといふか、夕鈴からすれば大河内も十分に個性的だと思っていたのに、生徒会メンバーも濃そうだ。極力関わらない方向で行きたいものだけど……。はあ、これからを憂いで溜息を零す。

「そうそう、彼はイタリア人だ。ハーフだけだね？」

……日本名が太郎？　ということはルウが本名なのではとか思っ
ては駄目なのだろうと、夕鈴は出てきそうだった疑問を飲み込んで
「分かった」と頷いた。そして三枚目を捲ったところで「ここが生
徒会室だよ」と目的の一室に到着してしまった。確認がまだ終わっ
てないと、夕鈴が口にするより早く大河内は特別教棟の最上階に位
置していたその部屋の扉を叩いた。

無情にも夕鈴が伸ばした手は何も掴むことはなかった。中からは
もちろん入室を許可する声が掛かり、がちやりと大河内が遠慮なく
扉を開く。夕鈴は、ごくりと息を飲んだのに対して、新聞部でーす、
と軽い調子で緊張感を全て取っ払えるのは大河内の凄いところのよ
うな気がした。

「あれ、会計さん一人ですか？」

「会長と、副会長は急遽予定が入られて、現在書記が不在なのは周
知の事実。残るは、俺一人です」

ま、新聞部の質問に答えるくらい俺でも平気ですよ？　と微笑
んだ男子生徒は――作業中だったのか、応接セットの一角に腰掛け

たまま机上をコツコツとペンで叩き——肯定以外は許さないという空気を孕んでいた。

夕鈴は手の中に会った三枚目の写真と部屋の中に居た生徒を見比べて、当然ながらの同一人物に頷いた。そんな夕鈴に気がついた生徒は、こつんと手にしていたペンを机の上に置くと、立ち上がり「君は？」と首を傾げる。

「僕の助手ですよ。カメラマンです。写真の許可も取っておいたと思いますけど」

「許可なくとも君撮ってますよね？」

「いやだなあ、そんなことするわけじゃないですか」

いいながら大河内は夕鈴の手の中にあるスナップを、すつと抜き取りポケットの中に納めた。素早い……。

「まあ、君に興味はありませんが、わざわざ助手？　なんてしてまでここに來た彼女には、興味がありますから、お茶でも淹れましょう。座ってください」

こつこつと机の上に広げていた資料らしきものを集めて整えると、それを片付けてこちらへと勧められる。躊躇した夕鈴を気にすることなく大河内は腰を降ろして、メモ用に手帳を取り出していた。しかし、なかなか隣に座らない夕鈴に気がついた大河内は、ぽすぽすと自分の隣を叩いて夕鈴を促した。

おずおずと緊張気味に夕鈴が腰を降ろしたところで、部屋の隅で準備を整えていた紅茶が運ばれてきた。

断崖絶壁

「僕、ここでお茶を淹れてもらったの初めてだよ」

「俺も淹れる日が来るとは思いませんでした。彼女に感謝してください」

ぼつりと零した大河内の台詞を聞き漏らすことなく、自分の分を最後に置いて夕鈴の正面に座った生徒は「どうぞ」と重ねる。夕鈴が小さく「いただきます」と口にしてティーカップを持ち上げるのを見守ってから話しはじめた。

「季節外れの転校生って君ですか？」

「あ、はい……」

「そうか、クラスの奴らが騒いでいた理由が分かった」

ふー、ふーっと紅茶を冷ましてから慎重に口を付けた夕鈴を楽しそうに見ながら、そう告げられて夕鈴は一口だけ飲んで、ソーサーに戻すと首を傾げた。

「君みたいな可愛い子なら、浮き足立つのも得心がいくというものです」

平然とそう口にした生徒に、夕鈴はかあつと頬が熱を持つのを感じて慌てて頬を押さえるが無駄だ。名前を聞いても良いですか？と楽しげに重ねられて夕鈴はぼそぼそと「雪杜夕鈴です」と答えた。

「雪杜さん、か……俺は、伏見です。碧葉台学園高等部生徒会会計をやってます。俺は先代から引き継いだのだけど、色々と事情があって、会長と副会長はまだその席を留任してます。予想は付くと思

いますけど、まあ、書記のこととかありますから……暫らくはこのままの体制で運営されると思います」

こちらが聞く前に伏見は、淡々と今の状況の説明を進めた。

「ところで、会長と、副会長は学校関係の急用？」

割って入った大河内に伏見は、貼り付けたような笑顔のまま表情の変化に乏しい顔に宛がっていた眼鏡を中指で押し上げてから「私用ですが？」と眉を寄せる。それ以上踏み入るなということだろうと直ぐに夕鈴は行き着いたのに大河内は「ほう。なんですか？」と重ねた。伏見が片方の眉を不機嫌そうに引き上げたことに、夕鈴は少し腰を引いたが大河内は微塵も気にならないようだ。

「私用の内容までお答えする理由がありませんね」

「うん。そうですね。それじゃあ」

「書記の件でしたら、俺たちの出る幕ではないでしょう？ 警察が動いているのだから彼らに任せれば良い」

「生徒会は関与していない。だから、関係ない、何も知らない、分からない。それで通すんですか？」

大河内が珍しく鋭い声を出したことに夕鈴は少し驚いて目を丸くした。しかしそのことに大河内自身が気がつくことなく話を続ける。

「僕はアレから会長と一度も顔を会わせていないのですがね？」

「偶然でしょう？ 会長は変わらず普通に登校し普通に生徒会業務も行っているわけだし、それにたまたま君が出会えないだけです。ここの生徒数を知ってるでしょう？ 会う会わないなどという話珍しいことではないはずですけど」

「本当にそうかな？ 今日だって僕は会長にといっておいたはずだ

けど、それを受けたのに都合をつけないというのは、誠意も見えないと思うけどね」

「それも偶然。運が悪かったとしかいいようがないです」

「あ、あのっ！　でしたら伏見さんがご存知のことだけでも、教えていただけませんか？　えっと、記事にはしないと約束しますから」

二人のやりとりでは永遠に続けても、平行線だろうと思いつた夕鈴の発言に、伏見は面白そうに口角を引き上げた。

「そんなこと助手の雪杜さんが決めて良いの？」

「え、あ、あー、ええと」

「構わないよ。それで話が進むのならば、今はまだ記事にはしない。僕だって確証のないことを書きたてるほど馬鹿じゃない」

伏見はちらりと大河内と夕鈴の間を逡巡したあと「今は、ねえ」と苦笑した。

「――……で、収穫はあったのか？」

「ないよ」

夕鈴は私室に用意してもらっていた座卓に突っ伏して紫月の心無い問い掛けに答えた。

「くだらん」

「くだらなくないよっ。私あんな風に体感温度が急降下したの初めてだよ。凄い冷や冷やした……」

あの二人仲が悪いのかな、と嘆息した夕鈴に紫月は興味なさ気に

「知らん」と、あつさり答えて黙した。紫月は家に居たときもそうだったが、外を眺めているのが好きなようだ。今も、もう冷たい風が吹き込んでくるといふ時間帯にも関わらず窓を全開にして棧に腰掛け紅い空を睨みつけている。

夕鈴はそんな紫月の横顔をぼんやりと眺めつつ「ねえ」と話を続けた。返事はないが、紫月は気がないだけで全く聞いていないわけではない。

「欠片ってどんな風に見えるの？」

すうっと入り込んだ風に前髪を揺らされ、瞳を細めつつそう問い掛けた夕鈴に紫月はやや思案気に唸ったあと。

「知らん」

とだけ答えた。夕鈴が思わず「え」と声を上げればようやく、窓の棧からとんとと降りて窓を閉める。

「ワシが知る分けなかるう？ 見えぬものに問うてどうする。ワシは欠片を見ることは出来ん。出来ぬものが知るわけない」

紫月はきつぱりと口にして夕鈴の傍に歩み寄ると、正面にどっかりと座って「茶でも淹れたらどうだ、気が利かん」と不遜な態度でいつでも使えるようにと家人が用意していた茶器を顎でさした。夕鈴は腑に落ちない気持ちに眉を寄せたまま「もう」と零して、お茶の準備を始める。

—— ……ピッ

その様子を見届けたあと、紫月は大好きな二時間ドラマを視聴し始めた。しかし、時間が少し遅かったのかクライマックス間近だ。ちつと舌打ちした紫月に夕鈴は呆れたように溜息を落とす。

「ねえ、テレビそんなに面白い」

「ああ」

「どの辺が？」

「時代劇？ とやはどこか懐かしい、ドラマというのは毎回驚愕させられる」

「ど、どの辺りが？」

「どーぞ。と紫月の前にお茶を出しながら掛けた夕鈴の質問に紫月は、ほんの少し浮き足立ったように答えた。

「知っておったか？ 人間は断崖絶壁に追い詰められると、己の過去を洗いざらい語り始めてしまう生き物なのじゃ」

「へ……へえ……それは、知らなかったなあ……」

どうだとはかりにふんぞり返る紫月に、それがセオリーだとはともいえなかった。続けそうな言葉を飲み込んだ夕鈴に、紫月は満足そうに頷いて、出された湯飲みに手を伸ばす。一口啜ってから「真人の淹れる茶が美味しいな」と零す。夕鈴はその台詞に眉を寄せたものの、間違っでは居ないから何もいえなかった。自分でも淹れたお茶を口にして、茶葉に申し訳ない気持ちになる。

「それから……」

と、続ける紫月に、夕鈴はまだあるのかと眉を寄せた。

「もし、欠片を見つけても、今は触れるな。何とかしようとは思う

な」

「――……え？ どうして？」

「今はいかん。どうしようもないようなら、ワシを呼べ。場を諫めるくらいならワシにも出来る。夕鈴に何かあつてからでは遅い」

至極真摯な態度でそういった紫月に、夕鈴は僅かに頬が熱くなるのを隠すように俯いて「分かった」と頷いた。

「目を失くしては、どうしようもないからな……」

ぽつと付け加えて、湯飲みの中身をぐいっと呷る。不味いな、どうにかならんのか。という嫌味よりも、ただ見るための目ではない自分に、傷付いている自分に夕鈴自身戸惑っていた。

黒夢

暗い……暗い。暗い――

怖い、寂しい……サ・ミ・シ・イ……――

視界が確保されることのない漆黒の闇。

上もなく下もなく……

ただそこに自分があることだけが分かる。

感情だけが浮遊する。

――……流れ込んでくる

クライ、コワイ、サミシイ……――

私を見て、私はここに居る……

貴方のために、ただそれだけのために、

私をつかって、私を……

貴方の必要とする全てをあげるから。

『私の……全て……？』

何もないこの場所で、全てと呼べるものはなんだろう。私は今何を
持っている？ 何を……。

「五月蠅い」

その日は秋晴れでとても清々しい一日だった。

それとは真逆なほど、夕鈴の寝起きは最悪だった。放課後になるうとしている今でも、今朝方紫月にしばかれた額が痛い気がする。うなされていた声が五月蠅かった。とは聞いたものの……

「もっと優しく起こしてくれてもバチは当たらないと思う」

それが正直な感想だった。

「夕鈴っ！ 帰ろう」

はあ、と、嘆息して帰り支度をしていた夕鈴の腕を取ったのは和葉だ。夕鈴はその勢いに目を丸くしたが、和葉は何か急いでいるようだ。廊下の奥から慌しい足音が聞こえる。そういえば今日一日大河内が静かだった。

「早く！ 追いつかれる」

「え？」

「外でみなとも待つてるから、美味しいケーキでも食べて帰ろ」

にこりと手を引かれ夕鈴は殆ど引きずられるように、廊下に出た。丁度、廊下に出たところで大河内に「待ちたまえっ！」と止められたが「行くよっ」と走り出した和葉に流されて夕鈴も駆け出した。

転校してきて数日というものの、夕鈴は思った以上にクラスに馴染めてほつとしていた。和葉やみなとの支えあって、大河内の悪ふざけ——本人はいたって真面目——があつたお陰で、これまでとあまり変わらない平穩——この追いかけてこも慣れれば楽しい——に胸を撫で下ろしていた。

なんとか大河内を振り切つて、玄關を出たところで、みなとと合流した。

「なんか、校門のところでアイドルか、モデルさんみたいな人たちが来てるらしいよ」

流れる的に行つてみよう！ という感じなのだろうなと和葉は察したが「そうなんだ」と相槌を打った夕鈴は全く興味持たないらしい。そのまま真つ直ぐ帰つてしまいそうな、夕鈴の腕を取ったみなとは「行こう！」と引いた。

「え、でも」

「夕鈴だつて見てみたいでしょー。目の保養になるかも知れないし、大したことないならそれはそれで笑い話になるだろうし、ね？」

にこにこと口にしたみなとに夕鈴は、僅かに渋る。和葉が隣に並んで歩きながら「どうかした？」と首を傾げればおずおずと口にする。

「お兄ちゃんが、あまり知らない男の人に近づいちゃ駄目って……」

流石にここで兄のことを出すのはどうかと思つたのだが、刷り込みというか長年いい続けられて来たことは、そう簡単に破れるようなものではない。雅の教育の賜物だ。

「っ！　夕鈴っ！　素晴らしくお嬢様なのね……」

がつつりとみなとに抱きつかれて声を潰す夕鈴を横目にしつつ「ブラコンとかいわなくて良いの？」と零せば「馬鹿ねっ！　お兄ちゃん鼻屑なだけよっ！」と攻め立てられた。ものはいよいよどうか、同じことをいつているとは誰も気がつかないのだろうか？

「仕方がないよ、雪杜君はお兄さんにとっても大切にされているんだからね」

当たり前のように聞こえてきた声に、みなとと和葉は肩を跳ね上げた。みなとから解放された夕鈴は「大河内君も今帰り？」と通常会話に戻る。思いの他タフだ。

「いや、僕はまだ帰るつもりはないのだけれどね。君たちの姿が見えたからつい追いかけてしまったのだよ。実に反応が良い」

—— ……遊ばれているっ？！

二人の脱力を他所に、夕鈴は首を傾げた。

「あ、あそこじゃない？　人だかりが出来てる」

「大河内見てきてよっ！」

校門の傍に、集まっている生徒たちへと向って、和葉は無謀にも大河内の背中を力いっぱい押し、突入させた。それとほぼ同時に、人垣は割れ、恐らく中央に居たのだろう人物がこちらに足を一歩踏み出し真っ直ぐにこちらへ向う。

向っていた大河内の横をあっさりと素通りして真っ直ぐに……

「あ！」

その姿に夕鈴も足を踏み出した。

「夕鈴、良かった。待ってたんだよ」

「み、雅ちゃんっ！　くる、し……」

殆ど誰も止める隙もなく流れるように、さも当然というように、夕鈴を抱き締めたのは雅だった。

「元気にしてる？　大丈夫？　一週間近く夕鈴の顔が見られなかったから、僕はとても辛かったよ」

「雅、その辺にしとけ……」

篤い抱擁に、身動き取れなくなっていた夕鈴を見かねて、聞きなれた声が雅を窺める。

「あ、真人ちゃんも来てくれたんだ」

「目立つから家で待とうっていったんだぞ……でも、雅が……」

「少しでも早く夕鈴に会いたかったんだ。学校も直接見ておきたかったし、それにお友達にもきちんとか挨拶したかったからね？」

紹介してくれるよね？　とにっこり微笑んだ雅に夕鈴はもちろんと頷いた。

再会

通常の兄弟間では有り得ないほどの距離感に、咄然としていた二人は、その台詞にはたと我に返る。

「和葉ちゃんに、みなとちゃん。クラスが一緒に席も傍なの。二人ともとても良くしてくれて……」

夕鈴の紹介もそこそこに雅は、ついつと二人の前に立つとにっこり微笑んで軽く頭を下げた。

「妹がお世話になってます。夕鈴の兄、雪杜雅です。甘やかせて育てしまったので、一人では何も出来ない妹ですが、よろしくお願いします」

「はい、もちろんですっ!」

乙女も羨む美麗な笑みでそう告げた雅に、みなとは頭が取れるほど頷いた。和葉も「よろしく、です」と軽く会釈する。そんな二人を順番に見たあと、笑みを深めた雅の袖を、夕鈴は乱暴にぐいと引いた。

「つて、ちよつと、雅ちゃん! やめて、恥ずかしいっ! 大丈夫だよっ! 私、子どもじゃないんだから」

「だ、駄目だよ、鈴ちゃん。挨拶はちゃんとしなくちゃ。あのね、物事には適当にして良いことと良くないことがあってね」

「今はお説教モードいりませんっ! ほら、あと一人、確かその辺りに」

「僕をお探しかなっ?! 雪杜君。ああ、貴方が噂の兄君ですね。僕は新聞部のホープで部長のおお……」

「君が大河内君だね」

あの、大河内にみなまでいわせなかった雅の確認は鋭かった。先程までの春先の心地良い暖かさはどこへ消えたのか、ツンドラ気候へと早代わりだ。そしてそれに気がつくことが出来たのは、和葉と外野、真人だけだった。

「その通り。僕がおおこ……」

「そうか、ありがとう。不慣れな土地だから、夕鈴も困っていたんだろう」

「いや、気にすることはない、ホープとして……」

「きつともう、心配は要らないと思うから」

ことごとく自己紹介を切られるのに、へこたれない大河内は流石だ。いいつつ、大河内の手を取った雅は、ふと口を閉ざした。

「——……雅ちゃん？」

大河内の手を握ったまま次の言葉をなくしてしまっていた雅に夕鈴が声を掛ければ、ぴくりと肩をこわばらせて我に返った。

「え、ああ、ごめん。何の話だったかな、ああ、大河内君だったねよろしく」

先刻までの刺々しさから一転して、にっこり。直ぐに手を離しそれだけ告げる。

「なんというか、愉快なお兄さんですね……」

「あー……ん。悪い……絶対騒ぎになるから連れてきたくなかったんだ……普段は普通なんだけどなあ。あいつズレるから、夕鈴に関して特に」

「ああ、苦勞が見えるような気がします」

真人は傍にいた誰とも知れない生徒との会話に花を咲かせていた。

「何？」

そんな中、和葉の痛いくらいの視線を受けて、真人は眉をひそめる。愛想の欠片もない声を出した真人に和葉は、うーんっと唸る。

「どこかで見た顔だと思うんだけど……雪杜……雪杜……」

ぶつぶつと零す和葉に真人は益々眉を寄せ、怪訝そうな表情を作った。

「名前、なんていうの？」

「雪杜で良い」

考え事に集中し始めると周りの声はどうでも良いらしい。和葉はあっさり不機嫌そうな真人の台詞を無視した。

「さっき、夕鈴が……ああ、ま、ひと……まひと、雪杜、真人」

そして、ぽんつと手を打って。

「練習試合に来てて、うちの連中ぼっこぼこにし、形試合では女子部員を虜にした最強戦士っ！」

「……その悪趣味極まりないネーミングは誰が……」

真人は和葉の台詞に一步引いた。気持ち的には潮が引くくらい、さあっと潔く後退した。

「真人ちゃん、凄い有名人だね」

「人気者なんだ？」

にこにこ茶々を入れた二人に真人は嫌な顔を隠すこともしない。

「馬鹿兄妹引つ込め」

「酷い！ 真人ちゃん」「鈴ちゃんにその物言いはないんじゃない？」

同時に口を開けば何をいつているのかさっぱりだ。酷いよお、と重ねつつもふと何かに気がついた夕鈴は真人へと歩み寄り、すんつと鼻を鳴らす。

「マドレーヌだ。真人ちゃんからマドレーヌの香りがする！」

「お前、犬並みだな……。雅がなんか作れていうから昼からサボって作った」

犬じゃないよ。とむくれた夕鈴に、外野は、多分NGはそこじゃないと突っ込みたかったはずだ。高々妹に愛に来るのに手作りお菓子を持参し、尚且つ授業は二の次って、こっちの兄も変わりなく馬鹿だった。

「じゃあ、帰ってからの楽しみが出来たね」

「え？ 鈴ちゃんこれから帰るところじゃなかったの？」

素直に疑問符を投げ掛けた雅に、夕鈴は「うん」と頷いて和葉と

みなとのほうへと視線を送った。

「今日は三人で美味しいケーキを食べて帰る予定なの」

にこにこ毒なくそういった夕鈴に「ああ、そうなんだ」と答えた雅は、誰の目にも明らかに落胆していた。だから、家で待たせて貰えば良いっていったんだよ。と零す真人に「ごめん」としょんぼり返す。そんな姿を見せられて、夕鈴を連れ出すことが二人に出来るのか？ いや、出来ない。

「あの、さ、夕鈴。私たち、その、よーじ思い出したから」

「そそ、そうそう！ 部活のね、うん。だから今日はごめんっ。また今度にしよう」

揃ってそう口にした二人に夕鈴は「え？」と眉を下げる。しょぼんを体現した感じだ。兄妹揃ってなんと意気消沈を体現することに長けているのだろう。

二人はその姿に罪悪感を覚えつつも「用事があるなら仕方ないよね」という雅の満面の笑みに、うん、仕方ないよ……と心の中で同意するしかなかった。

そっか、残念。と、諦めた夕鈴を見送ってみなとと和葉は顔を見合わせ、肩を竦める。

「あれじゃ、モテたことないよね……」

「抹殺されそう」

「ああ、でも、雅様素敵だった」

「……様？」

ぼやんと胸の前で両手を組んでそう告げたみなとから和葉は一

歩下がって眉を寄せた。騒がしい三人が正門を出て行くと、皆散り散りにその場をあとにする中、みなとと同じように立ち尽くした大河内は、雅に握られた手をじっと見つめ、ぎゅっぎゅっとか何かを確認するように開いたり握ったりを繰り返した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9608n/>

封印の住処

2011年2月28日20時20分発行